

『PSYクオリアって？』
『ああ！』

ヤマシロ=サン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

PSYクオリアのチカラに振り回されるとある青年とちよつとばかり愛の重い（当社比）ユニットたちの物語。

※作者はPスタン以前の知識に関してはアニメしか無いです。その辺をご了承をお願いします。

【番外編】本編とは関係ないスタンダードのユニットのお話を書いたりします。よければ……

目次

第10話	280
第9話	250
第8話	222
第7話	181
第6話	143
第5話	108
第4話	85
第3話	55
第2話	25
第1話	1

番☆外☆編

ほしくて。』
——
トップスターチエル 『貴方に聴いて
311

第1話

20XX年、世界中で爆発的にカードゲームが流行りだし、カードゲーム人口は数億人を超えたという。そして、そのカードゲームの中でも一番人気があるのが……そう、『ヴァンガード』である。他のカードゲームとは違い、ルールが簡単で誰でも始められるという点から近年急激にヴァンガードを始める人が増えていくのだ。

しかし、彼らは知らない。

カードゲーム内の設定で惑星『クレイ』に立った霊体とされているが、

それは実在するということを。

クレイには実際にユニットが存在するということを。

そして、そのユニットと繋がることのできる能力があるということ。

そう、『P^サS^イYクオリア』の存在を。

これはそんな素晴^{くそつたれな}らしいチカラに振り回される1人の男の物語である。

朝日が起きろと言わんばかりに照らしてくるが、あいにく全く眠気が治らない。ふああと俺は大きなあくびをしながら教室の扉を開ける。この眠気も全部『アレ』の所為なんだけどね。そして、教室の一番後ろの席、しかも窓際という内職やら何やらこっそり隠れながら行うには絶好の場所、そんな席に座っている男。窓から外を眺めているようだが、手元には黒いプラスチックケースのようなもの、一目でわかる、アレはデツキだ。すると、気づいたのかその緑色の鋭い眼光で俺を見てくる。

「おはよーさん、トシキ。」

「……やつと来たか。早く始めるぞハルト。」

因みに俺の名前は『木崎ハルト』^{きざき}後江高校一年の普通の学生だ。流行りに便乗してヴァンガードを始めたわけだが、その所の為で色々面倒なことになっている。まあ、その話は後でいいだろ。

そして、朝っぱら開口いきなり俺にファイトを申し出てきやがったキチガイ野郎の名前は『權トシキ』^{かいかい}、孤高のファイターなんて呼ばれており、その名の通りヴァンガードファイトがめっちゃくちゃ強い。強いヤツにしか興味が無く、あまり周りと関係を持とう

としない。コイツが話すヤツって言ったたら俺とタイシくらいいしかいねえな。

「あのさあ、会って開口一番ファイトってなんなの？俺眠いんだけど？」

「……今日は俺が勝つ。さあ、始めるぞ。」

無視かよ。トシキは俺の発言なんぞ関係なくデッキを机に置く。

「はあ……、一戦だけだからな？HRもあるし。」

トシキはこくりと頷く。

因みに、トシキの使うクランは『かげろう』だ。相手のユニットを退却させるスキルを持つユニットが多く、こいつのエースモンスターは『ドラゴニック・オーバーロード』で大体『黙示録の炎(笑)』相手を焼き尽くしている(精神的に)。

「今回俺はどっちを使おうかな。」

どっちというのは、俺はデッキを二つ持っている。ひとつは『ロイヤルパラダイン』、もうひとつは『シャドウパラダイン』のデッキだ。

「……シャドウパラディンを使え。」

「ええ…、なんでアナタが決めるんですかねえ？」

「お前のシャドウパラディンはレンを想定したいいいシミュレーションになる。だから指定したんだ。」

「はあ、お前って本当レンのこと好きだよなー、ホモかよ。」

「…ぶつとばすぞ？」

トシキの鋭い眼光がより鋭くなり殺気を帯びる。

「ゴメンナサイ」

ちなみにさつきから会話に上がる『レン』というのは、昔トシキが中学の頃のクラスメートだった『雀ヶ森^{すずがもり}レン』のことである。なんか2人の間でいざいざがあったらしい。で、そいつを倒すべく俺相手に修行をしている、と言ったところだ。レンはシャドウパ

ラディン使いというところから俺がいいシミュレーションになるとのことらしい。

「……それにお前はP.S.Y.クオリアを持つてるからな。」

「お、おう……。」

そう、俺はP.S.Y.クオリアを発現させている。さっき言った、『色々面倒なこと』とはこのことだ。

そもそもP.S.Y.クオリアとは何か、まずはそこから説明しますかね。

P.S.Y.クオリアってのはカードの声を聞き、カードによる導きを得られる能力のことだ。発現すれば、完璧なデッキ構築や最善のプレイングのイメージをカード自身が教えてくれるため、ファイトにおいてほぼ無敵と言える実力を持つようになる。例を挙げればファイトを行う前からフィニッシャーとなるカードを認識して、その通りにファイト

を進めていったら気づけば勝ってたみたいな感じだな。科学的にいうと共感覚っていうのが高まり、フアイトの流れがよく見えるようになるらしいのよ。まあ、事實はこれって惑星クレイのユニットと繋がるためのチカラらしい。……まあ、俺のユニットたちは絶対私欲のためにこの能力を俺に取り付けたんだろうけどな。

「ごたごたしててよくわからなかったと思うから、結論をいうとだな、俺のデッキの『ブラスターブレード』と『ブラスターダーク』を始めとするユニット達の俺への愛？いや、依存心が強すぎてPSYクオリアが発現しちゃったってことです、はい。」

「はいそこ！絶対『なんだお前ホモかよ。』って思ったでしょ？まあ待ちたまえ。この話には続きがあるんだよ。」

俺がヴァンガードに触れたのは2年くらい前のことだ。ちまたでヴァンガードが人気になり始めてたからそれに便乗すべくスターターデッキを買うためにとあるカードショップに行っただけだけどそこに訳ありでデッキが売られてたんだよ。そう、それが例のロイヤルパラディンデッキとシャドウパラディンデッキだったわけ。ヴァンガードの人気は想像以上にすぐくてスターターデッキも全部売り切れてたからさ、安値だった

から二つとも買ったのよ。しつくり来る方使えばいいかなと思つてき。まあ、訳ありつて時点で怪しむべきだったんだらうけど、ルールやら何やらいろんな基礎事項を覚えて何とかそのデツキを使いこなしてファイトを積み重ねていつてたんだよ。訳ありだから一体どんなデツキなのかと思つたけど、デツキ自体はちゃんと回つてるのよ。コンボも出来るし、トリガーとかの枚数も適切だし、初心者にはわりと持つてこいなデツキだったんだよ、二つともさ。

そして、ある程度キャリアを積み重ねて、とあるショップの大会の決勝戦に望んだ時に起きたんだ。

決勝は今日比較的デツキ回りが良かったロイヤルパラディンを使ってたんだよ。3ターン目くらいかな、ブラスターブレードにライドしたあたりで急に目の前が真っ白になってき、ブラスターブレードが敵を切り裂いてる場面が見えたのよ。敵を殲滅したあとソイツが俺の方を見たんだけど、なんか優しく微笑んでたんだよ。……目が怖かったけど。

で、今度は相手がグレード3にライドした瞬間に声が聞こえてきたんだよ。

『警戒せよ。』

つてさ、もうこれは流石に精神科行かないとなあつて思ったね。薬キメた覚えはないのに幻覚や幻聴が聞こえるんだもん。

まあ、相手が『ドラゴニックオーバーロード』にライドした時点で察したけどさ、オーバーロードが攻撃してきた時だけガードを多めに付けてトリガー二枚引きでも通らないくらい固めたのよ。そしたら見事に相手はクリティカルトリガーの二枚引き、警告通りに警戒してたから守り切れたんだよね。従つててよかつたよ……で済めば良かったんだけどさ、えげつなかつたのはこっからなんすわ。

俺のターンで初手はリアガードのブラスタブレードでネハーレンを攻撃、インターセプトを封じたんだよ。でさ、ヴァンガードの騎士王アルフレッドの攻撃でとんでもないことが起きたんだよ。相手は不味いと思つたのか手札を一枚ドロップして完全ガードをしてきたんだけどさ、そのときのツインドライブでクリティカルトリガーとスタンドトリガーを連続で引いたんだよ。相手も面喰らつた表情してたし、俺も多分同じ表情

してたわ。効果は全部ブラスタースターブレードに振って、結局ブラスタースターブレードが試合を決めて見事初優勝したんだよね。

で、その夜眠ったかと思ったら、なんか変な場所にいたんだよ。

「……あれ、どこだここは？地球……じゃないよな。」

辺り一面は草原が広がって、地球にどこか似てるんだがなんか違う感じがしたんだよね。

『……マイヴアンガード。』

「えっ？」

なんか声をかけられた気がして振り向いたんだよ。

「…マイヴアンガード……なのか？」

白い鎧を纏い、その手には大剣が握られ、その鋭くも凛々しい瞳は俺を見つめていた。俺はそいつに見覚えがあった。

「……ブラスター…ブレードか？」

そこにいたのはヴァンガードのキャラクターのブラスターブレードだったんだ。

「やつと会えた……！マイヴアンガード……いや、はるとおおおおおおおおおッ
!!!」

「うおっ!？」

会うなりいきなり抱きしめられてき、びっくりしたわ。

「おいおいおい！会うなりいきなり抱きしめてくるって何だよ!？」

「…お前は私のことが嫌いなのか？ハルト。」

「嫌いっていうか、カードのキャラクターに愛情抱くほど、脳内ピンクじゃないわ。てか、男同士のハグとかホモかよ。」

この世の中には同性愛者がいることにはいるし、俺はそういう人たちを卑下するつもりはないがなりたいたいとも思っていない。するとき、ブラスタブレードは可愛く(↑!?)頬を膨らませて不機嫌そうな表情をしたんだよ。

「むう……、だったらココ触ってみろ。」

何を思ったのか、鎧を外してインナー一枚になったブラスタースターブレードを俺の手もち、胸に手を当てさせてきたのだ。

「フアツ!？」

その感触はマシユマロのように柔らかくふにやりと手の圧に合わせて形を変えたのだ。

「お、おま……おまえ……！女だったのか!？」

ブラスタースタールは顔を真っ赤にさせながら視線を逸らしていた。

よく彼女を見返してみると、俺より背が低いんだよね。それに鎧を纏ってなかったら華奢な身体してるし、肌も白くて綺麗なんだよ。コイツ本当に女なんだわ。

「……わ、わかっただろう？私は立派な女なんだ。ほ、ホモなんかじゃないぞ……?？」

再び俺に抱きついて来た。鎧付けてないからさ、どことは言わないけど柔らかい感触が直に伝わるんすよ。

「ずっと会いたかった……！ハルト……！」

「まさか、お前があの時、『警戒せよ』って言ったのか？」

「そうだよ。」

「ッ!？」

突然、後ろから似たような声が聞こえ、背中から抱きしめられた。恐る恐る振り返るとそこにいたのはブラスタースターブレードとそっくりだが、全くの真逆の黒い鎧を纏っている女の子が俺に抱きついていて。

「んっふふっ、もう誰かわかるでしょ？」

「…ブラスタースターダークか。」

「あつたりー！」

なんとブラスタードークもまさかの女の子だった。てゆうか、鎧の色が違うだけで2人ともそっくりなのに驚いたもんだ。

「なんで、お前ら俺に抱きついて来るんだ？身に覚えがないんだけども。」

「ええ〜!？」

「そんなことないぞ。ハルトはずっとショーケースの中に閉じ込められてた私たちを貰ってくれて、そしてこんなにも強くしてくれたんだ。」

ショーケース…？貰ってくれた……？

この二つの言葉にどこか覚えがあつた。

「お前ら……俺のデツキのユニットたちなのか？」

「ぴんぽーん！そうだよー、私たちはハルトの持つてるシャドウパラダインのデツキとロイヤルパラダインのユニットなんだー。」

「私が警戒を促したし、クリテイカルトリガーとスタンδροトリガーを呼び寄せたんだ。」

「マジかよ……。」

「スタンドアップ、(ザ)、ヴァンガード!」

「……ハルト、PSYクオリアを使え。」

「え、やだよ(即答)」

「なんでだ?」

「お前それ何回言わせるんだよ?これ使って勝ったとしても勝った気がしねえんじやボケ。」

「……レンを想定したフアイトにならないんじや意味がないだろ。」

「はあ、俺のP S Yクオリアはある意味あてにならないだろ、強すぎて。」

「…構わない。」

「……まじすか。んじやあ、使うけど。」

トシキは構わないと目つきを更に鋭くして言った。俺は溜め息混じりに発現させた。P S Yクオリアを。

「ツインドライブ、1枚目、ゲット、クリティカルトリガー、効果は全部フアントムブラスタードラゴンへ。あ、2枚目もクリティカルトリガーね。はい、ゲット。これもフアントムブラスターで。」

「……………」

結果はまあ、お察しの通りだよ。トリガーを引き過ぎてフアイトにならないんだわ。

だってあれやぞ、ファントムブラスターのとなりにいるブラスターダークがニコニコしながらこっち見てんだから嫌でも察するわ。どうやったらこんなトリガーが連続で出るのか逆に知りたいよ。(理論的に)

「……だから使いたくないんだよ。やっぱり自力で勝たないとなんか面白くないんだよな。」

運ゲー要素であるトリガーチェックで全部トリガー引き当てちゃうとかもうカードゲームじゃないやんかコレ。

惑星クレイとその住人たちと繋がることのできるチカラ、『PSYクオリア』

これはそんな素晴くそつたれならしいチカラを宿してしまった青年の物語である。

*
*
*

このファイトの流れを自在に操り、トリガーすら呼び寄せてしまうチカラ、確かに素晴らしいが、ヴァンガードをやっているのは自分だ。それに従ってファイトをするのは果たしてそれでいいのか？ いや、いいわけがない。自分で戦略を立て、進め、自分の運でトリガーを引き当てる、それがヴァンガードの醍醐味のはずだ。だったらこのチカラは……

「なあ……、このチカラって手放すことはできないのか？」

この発言は失言だったとすぐに気付かされた。

さつきまでの朗らかな雰囲気は消え、氷河期のような冷たい視線が俺に集中する。

「ハルト……ハルトは私たちを捨てるのか……？」

「嫌だ……！またあんな場所に戻るなんて嫌だ……！やめてハルト、そんなこと言わないでよ……！ハルトに捨てられたら私は……！私たちは……！」

2人の抱きしめる力は更に強くなり、見つめる瞳は黒く濁る。その瞳には俺しか映していない。

「……大丈夫だ。お前たちを捨てるなんて絶対しないさ。だから安心しろ。」

俺は2人を抱きしめ返した。半分後悔しながら……。

「ふふ……ハルト……、私はハルトの為ならどんなことだってするさ、だから………ずつとそばに……」

ああ……、このチカラは手放せない、手放すことは許されないようだ。

「……ハルト、あなたは私を、私たちをあそこから救い出してくれた……、刃向かう奴らは全員消してあげる……だから、離れちややだよ……ハルト……」

何故、訳ありで格安の値段で売られていたのか、今この瞬間わかったような気がした。

第2話

『ヴァンガードチャンピオンシップ』

まあ、名前の通りヴァンガードの日本一を決める大会なんだけど、その全国大会に權が所属するチームQ4、えーつと、くわどりふおりお？だったつけ？まあ、いいや。Q4が出場するらしいのよ。何気に二回連続で地区予選突破してるらしいからそれなりに強いチームなんだろうな。

そこには勿論このチームの名前もあつた。

『チームAL4』

俺はモニター越しのソイツに目を凝らす。

「……ふーん、あの人が『レン』ねえ……。」

「ハルトはそのちゃんぴおんしつぶ？つていうのには出ないの？」

「どこのチームにも所属してないんだから出られるわけないでしょ？それに、俺はそこまでガチでヴァンガードに打ち込んでるわけじゃないs……、あつ、ごめん!!冗談だつて!!」

「はるとお……、どうしてそんなこと言うのよ……、私たちには、私には貴方しかいないのに……!グスツ」

「悪かったって!だから泣くなよ、アカネ!!」

涙目だが、赤い瞳に地面ギリギリまで伸びているロングテールの赤い髪、青いネクタ

イに白い袖の無いブラウスのような服装でそこから収まりきれないと言わんばかりに強調している二つの大きな双丘、服の丈がへそが見える辺りまで短いのは大体それのせいだと思う。そして、黒いシヨートデニムからすらつと真つ黒なタイツで覆われた長い脚が伸びている。うん、スタイルやら全てを含めて美しい。

『ハイドッグブリーダーアカネ』

それが彼女の名前だ。

俺は眠っている時、勝手にPSYクオリアが発動して、霊体として惑星クレイに召喚されるようになっていた。うん、そうなるようにブラスター二人組が仕込んだそうです。

「あ、あの……ハルト……わ、私と、い、一緒に、散歩しない？」

顔を真っ赤にさせてもじもじしながら散歩に誘って来たのがアカネってわけだ。

「お、おう。いーげ〜」

「ほ、ほんと!?!」

俺が承諾するとアカネの目は普段のキャラのイラストからは想像がつかないくらい目をキラキラさせ、嬉しそうな表情を見せる。

「〜♪」

アカネは俺の腕に抱きつきながら一緒に歩いていった。アカネの大きな胸は俺の腕に押し当てられ、つぶれて形が変わるほど強く密着していた。

「こうしてハルトの隣を一緒に歩けるなんて夢みたいだなあ〜♪」

「俺もさ、まさかヴァンガードのユニットたちとこうして過ごせるなんて思ってもなかったさ。」

まあ、ここまで依存されてるとも思わなかったけどな！

「えへへ……」

『おっ、ハルトじゃん！』

すると、遠くから猛スピードで迫る小さな影……あいつか。

「ういんがる。」

「おう、ういんがるさんだぜ！」

すぐ目の前までやってきたのは、ロイヤルパラディンのワンコの一人『ういんがるだ。
だ。』

「こんなとこで何してんだ？今日は相方の方はいないのか？」

「だから、そいつを探してるんだよ。」

ちなみに相方というのは、こいつの彼女でもある『ふろうがる』のことだ。生まれたばかりからの幼馴染らしくて、最近付き合い始めたらしい。

「……でもさ、アイツ最近お前のことばつか話してるんだよ。」

あつ、なんか寒気が……。

「帰ってくるなり、ハルト、ハルトってさ……。」

どんどんういんがるの声のトーンが低くなっていく。

「オレの彼女じゃないのかよって毎回思うんだよな。浮気を目の前で実行されてるような、そんな気分でき……。」

「なんか……ごめん。」

「おまえの……！おまえのせい……！」

うん、これは罪悪感しか湧かないわ。ふろうがるもふろうがるけど、普通に申し訳なくなる。

「なーんてな！」

「へ？」

ういんがるはいつものような明るい笑みに戻る。

「俺たちハイビーストはハルトの飼い犬みたいなモンだからな！飼い主のことを好きになるのは当たり前だろ！オレからすれば寧ろ嬉しい話だぜ！」

「お、おう……」

なんか認識が色々可笑しいような気もするが、恨まれてないならよかつたわ……。

「今度、ふろうがると三人で一緒に追いかけてこしょう……ぜツ!?」

バチイイイインツ!!!

すると、突然鋭いムチのような何かが俺の頬を掠めういんがるに襲いかかった、ういんがるは辛うじてそれを避ける。

振り向くと黒いオーラを出しながらムチを構えるアカネの姿が。

「……私の、アカネのハルトなのに……! 犬っころの分際でエ……ツ!!」

「アカネ!?!」

なんというか、ういんがるに對する殺気が凄い。ハイドッグブリーダーなんて名前に疑いを覚えるくらいういんがるを敵視してるわ。つてなんでこんな冷静に解説してるんだよ!?

「……あー、今はアカネさんの時間だったか。」

ういんがるは分が悪そうな顔をする。

「んじゃあ、オレは退散するわ。ハルト、また今度な!」

「お、おう……。」

ういんがるは軽快に走り去って行った。

その直後、アカネが腕に抱きついてきた。しかも、さつきよりも強く抱きしめていて俺の右腕がミシミシ言ってるので離してください。

「…………アカネ？」

アカネは涙目で俺を見ていた。そして、口が開く。

「今は私の時間なんだから、私のことだけ考えてればいいのっ！」

「お、おう…………。」

その時の表情はあの時ブラスターブレードとブラスターダークに抱きしめられた時と同じように黒く濁った瞳をしており、俺のことしか映していないようだった。その光景に少し恐怖してしまう。

「うーん、そうだハルトっ！私いいこと思いついちゃった！」

うん、嫌な予感しかしない。

「私をハルトのペットにするんだよ！ね、いいアイデアでしょっ!?!」

「はっ!？」

ある程度覚悟をしていたのだが、それを遥かに上回る答えが返ってきてしまった。は？ペットってなによ？（錯乱）

「わたしがペットになればさ、番犬という名目でずっとそばに居られるでしょ？それに人権なんてものがなくなるから……………んっ♡」

何を思ったのか俺の腕をつかんだアカネはそれを胸に当ててきた。あつ、やわらかい（感銘）

「私の身体を自由に使っていていいんだよ？」

「ね？だからこの首輪を私につけて……………♡」

どこから出したしその首輪。もちろん俺の答えは決まってるさ。

「(つけ) ないです。」

倫理的に悪すぎるから……ね？

「よう、トシキ」

俺はいつも通り学校に登校してきたわけだが、トシキの表情がいつもよりも険しく見

えた。普段からそんな表情してるけどさ、なんかちがうんだよな。

すると、トシキはおもむろにデッキを一つ机に置いた。俺はそれを手に取り、カードを確認してみる。……ん？これは…

「ん、これロイヤルパラデインじゃん。どうしてお前が持つてるんだ？」

そう、中身はロイヤルパラデインのデッキだった。トシキはかげろうしか使わないし、なにか訳ありのようだった。

「……それは『先導アイチ』のデッキだ。」

「……あー、なるほどね。」

トシキの一言で俺は全てを察した。先導がロイヤルパラデインを捨て、今はシャドウパラデインを使っていること。実際に会ったことはないけどモニター越しだと雰囲気が変わった気がするんだよな。

「……アイツもレンと同じ、P S Yクオリアに溺れてる。」

「……。」

なんで、こう、このチカラに頼りがちになるのかなあ。よくよく考えたら自力じゃな
いってことに気づけないかな、いまいち達成感に欠けるよな。……まあ、全国大会くら
いになると是が非でも勝たないといけなくなるんだろうから仕方ないと言えば仕方な
いか。ま、カードゲームってモンは本来楽しいモンだからな。あまり勝ちにこだわり過
ぎると痛い目見るぜ。と、その君に言っておこう。え、俺？俺はねえ、相手を自力で
ねじ伏せるのが楽しいからいいんですよ。具体的に言えばそうだな……、P・S・Y・ク・オ
リ・ア・使う人をP・S・Y・ク・オリア無しで完全勝利UCする……とかな？まあ、立ち回り次第
で割となんとかなるけどね。

「だから……俺がアイチを止める。止めてみせる……！二度とあんな過ちは犯さない……
！」

トシキは普段とは違う意味で決意を抱き、真剣な表情をしていた。これなら、大丈夫

だろう。

「そっか、なら頑張れよ。俺が教えた通りに立ち回れば多分いけるはずだぜ。」

「……いや、今回はアイチのデッキで戦う。」

トシキは先導のデッキを手に取る。

「ブラスタブレードの……、いや、アイチのロイヤルパラダインの強さを証明してみせる！」

……まあ、説得するならある意味そっちの方がいいかもしれないな。あと、足りないのは……コレくらいか。

「そうか、そんな久しぶりにやる気になってるトシキ君にはこれをあげよう。」

俺は一枚のカードをトシキに渡した。

『アルフレッド・アーリー』

「……ッ、これは……！」

「あとPSYクオリアを打ち破るのに必要なのは相手の予想を超えることだな。だった
ら、これが一番最適だろ。まあ、お前がうまく引ければの話になるんだけどな。」
トシキはアルフレッドアーリーのカードを少し見つめたあと、俺を見て言った。

「……ありがとう、ハルト。」

「礼はいいよ、なんかお前らしくなくて気持ち悪いし。」

「……うるさい。」

「頑張れよ、トシキ。」

「…ああ。」

その放課後、俺はトシキと二人である場所へ向かっていた。

「おまえさ、どこで先導と戦うつもりなの？」

「…裏ファイターと呼ばれる奴らが集まってるところだ。あそこが最適だろう。」

へえ、裏ファイターとかいるのね。強そう（小並感）。

「……ッ！」

次の瞬間、頭の中で何かがよぎった。勝手にPSYクオリアが発動したのだ。

「…どうしたハルト？」

「あー、なるほどね。そーゆーことか。」

「…ハルト？」

「レンがアイチをP S Yクオリアで呼んでるみたいだな。なんか俺も拾っちゃったけど。」

「レンが…!？」

この感じだとシャドウパラディンデツキを先導に与えたのもレンかもしれないな。

「取り敢えず誰かに連絡してアイチを拉致させた方がいいかもな。なんか言い方悪くなってるけど。」

「…：…それならアイツに頼もう。」

トシキは携帯を取り出し、誰かに電話をかけた。

「……………ああ、頼んだ。」

トシキは小さい声で誰かに頼んだあと携帯を閉じた。

「……………これでアイチは大丈夫だ。必ず来る。」

先導の件はなんとかかなりそうらしい。んー、ちよつと俺が行くしかなさそうだな。

「トシキ、レンの場所へは俺が行くよ。」

「ツ！……………ハルト……………！」

「おまえの知り合いだから会っておきたいってのもあるし、あとは単純に興味かな。レンもPSYクオリアを持ってるんだろ？」

「ああ……………だが……………！」

「心配すんなって、別に喧嘩ふっかけるわけじゃないんだからさ。」

「じゃあな、トシキ。終わったら打ち上げでも行こうぜ。」

「……考えておく。」

「はっはっは、冗談じようd………え？」

あのトシキが打ち上げ参加を検討しておく………だと？そもそも馴れ合うのが嫌いなトシキが打ち上げに………？

「おまえ………本当に權トシキか？」

「はっ倒すぞっ？」

「ごめんなさい。」

「……………」か。」

あの後、トシキと別れた俺はP S Yクオリアの導きに従い、気づけばどこかの地下街にある『P S Y』と書かれた店?の前にいた。

中に入るとそこはカードショップのようだった。なんかすごい怪しい雰囲気が漂っていたが、

「いらつしやい。」

奥の方から現れたのは水色の髪で背の高い女の人……………誰だっけ、なんか見覚えあるんだけど……………

「はじめまして、俺、木崎ハルトつていいいます。ちよつと用事があつてこの店に来たんですけど。」

「あら、こんなところに用事なんて変わった人もいるものね。それで誰かと待ち合わせでもしてるの?」

「待ち合わせっていうから……まあ、そうですね。この店に雀ヶ森レンって人来てますよね?」

「……ッ!!」

その瞬間、女の人の目の色が変わった。驚いてるみたいだ。

「何故……あなたが……それを……!」

俺は店の奥の方へ足を進めた。

「あれ、違う人が来ましたね。」

そこには赤くて長い髪の男、『雀ヶ森レン』が座っていた。彼も内心驚いているようだった。まあ、来たのが先導じゃなくて全く知らない男だったら……ねえ？

「先導なら来ないぞ、アイツは別件で連れて行かれてるからな。」

レンは目を狭めた。

「なんでキミがそれを知っている？誰にも言っていないはずだが？それに君は何者だ？」

「俺は木崎ハルト、まあ、普通の高校生だよ。」

「……雀ヶ森レン。」

「知ってる。まあ、オレもお前さんのスピリチュアルなパワーを拾っちゃったから、先導の代わりに来たってだけだよ。トシキからお前の話は聞いてたから会ってみたかったのが本音だけだな。」

「トシキ!? 權のことか!？」

レンが食い気味にそう言った。

「ああ、一応クラスメートだしな。仲良くはしてるよ。」

「それに私のPSYクオリアを辿って……、ッ！まさか!!」

「ああ、俺も持つてる。」

そして、俺はPSYクオリアを発現させる。

「まさか……!」

まさか私と先導アイチ以外にこのチカラを持っている人間がいるなんて……

「俺はさ、こんなチカラ持つてるけど、どちらかと言えば思考はトシキに似てるんだよね。」

「……権に?」

「自分で戦略を考えて、立てて、戦う先導するのがヴァンガードの醍醐味だと思っただわ。たしかにこのチカラがあれば確実に勝てるかもしれない。でも、それだと俺は先導者になれない。カードに先導されてるって言った方が正しいかな、そんなファイトに何の意味があるんだらうって思うんだよな。」

『はるとお……?』

「ツ!!?」

すると、どこから声が聞こえてきた。ふと彼を見ると、後ろには二つの影、どこか見覚えのある姿だった。しかし、どこか不気味だったのだ。

「……お前らがやり過ぎるのが悪いんだからな？自己責任つてやつさ。」

『私はハルトを絶対に勝たせたいだけだ。勝つための最善手を打っているに過ぎないさ。』

「それを俺に打たせてください。」

『私たちはハルトを想ってやってるのになんでそんなこと言うの……？』
「度がすぎるだけです。少しは俺の気持ちにもなつて考えてみて下さい。」

しかし、彼はそんな不気味なオーラを気にしておらず、普通に会話をしている。

「ゴホン！とりあえずー、まあ、自力で戦った方がいいよつて事を伝えたかったです！」

「……信じない。」

「え？」

「私はそんな事信じない!!そんな綺麗事を言つてどうせお前もチカラを使つて勝つてき

たんだろう!？」

信じられなかった。私はこのチカラさえあれば、ファイトに負けず最強でいられる、今までそうして戦ってきた自分を全て否定されたようで嫌だったのだ。

「そんなことないけどなあ、俺の流儀は楽しく相手に完全勝利することだからな。PSYクオリアを使ったら楽しくないじゃん。」

『『はると……?』?』』

「嘘です楽しいです。ま、まあ、真剣にやるときはチカラを使わないようにしてるだけだよ。」

「……。」

彼の言っている事を聞いていると昔同じような事を言っていた人を思い出す。そう、權も同じことを言っていたのだ。

「んーそうだな。だったら、PSYクオリア無しで俺がお前に勝てば納得してくれるってことか?」

は?こいつ今何を……、PSYクオリア無しで勝つだと……!？」

私の中で何かが切れた。

「……バカにしているのか？」

自分でも声が震えているのがわかった。こんなに頭にきたのは生まれて初めてだった。

「いや、バカにはしてないよ。納得してもらえないなら、納得させるしかないってことさ。……それにこれはきつとトシキも望んでるはずさ。」

「權……も……!?!」

何故ここで權の名前が出てくるのか、權ほど強さを求めていた人物はいないはず、なのに強くなった私を認めず去って行ってしまった。

「……わからない。」

ただ……ただただ意味がわからなかった。

「……わからない。」

レンはそう呟く。そのあと俺を強く睨み、言った。

「……………いいでしょう、このチカラの全力を持ってあなたを倒し、私が正しいということ
を証明してみせましょう。さあ、ファイトだ!!木崎ハルト!!」

レンはデツキを掲げた。目はしっかりと俺をみており、真剣そのものだった。……………
いいね。

「よし、だったら受けて立つぞ雀ヶ森レン!!ファイトだ!!」

俺とレンはちようどいいところにあつたやたら大きいファイトテーブルに移動する。
あれ、これって巷で人気のモーションなんたらかんたらシステムってやつ?デツキを置
くと、ファイトテーブルのラインが光りだし、目の前のガラスケースの中にいつも夢の

中で見ている『クレイ』のフィールドが映し出される。

「おお……！」

思わず声が漏れた。だつてさ、マジで再現度高くてびつくりしたんだもん、いや、感動したわ。

そして、お互いに手札を揃え、準備が整ったことを確認する。

「いくぞハルトー！」

もう名前呼びかい！

「来い！レンー！」

来いってなんやねん！（自問自答）

「スタンドアップ！（ザ）ヴァンガード！！」

こうしてお互いの信念をかけたファイトが幕を切つて落とされた。

第3話

「スタンドアップ、(ザ)、ヴァンガード！」

そして、お互いにファーストヴァンガードを表にする。

「フルバウ。」

「同じくフルバウ。」

「……私と同じ、シャドウパラディンですか。」

「ロイヤルパラディンでもよかつたんだけどね。……だってアルフレッドアーリーあげちゃったし。」

流石にもう返ってこないだろうなあ……（後悔）

あれ結構強いもんなあ、我ながら調子に乗りすぎたと思ってるよ。

「ふふ……真のシャドウパラディン使いはどちらか決めようって魂胆ですね、面白い……！」

あれ、この子結構ノリがいいぞ？いくら勘違いとは言えども俺がシャドウパラディン使ってるだけでそんな解釈するなんて、好きな女子と偶々少し話しただけで「あれ、○ちゃんもしかして俺に気があるんじゃないや………せや！」ってくらい悲しい勘違いをする陰キャ男子と同じくらいノリがいいぞ（？）

「だがしかし、PSYクオリアが使えるアナタならもうわかっていてでしょう？わたしにはこのファイトの結末はもう見えているのですよ……？」

だろうね。目が虹色に光ってるし、どんなイメージが見えてるのかわからないけど、オチはなんとなく読めた。ファントムブラスターでぐさーっ！てなるやつかなこれは。

「……まあ、俺はただでは死なんからな？」

「ライドザヴァンガード！！」

そして5ターン目、レンのターン。ブラスタードークからライドされる。

レンのダメージは3、俺のダメージは1、優勢に見えるがPSYクオリアを使うレンならこれくらいは簡単にひっくり返してくる。これは7ターン目以降の攻撃を耐えるための保険でもあるのだ。そして、俺は手札にあるカードを集めようとしている。まあ、これに関しては運なんだけど。

『わたしが呼んであげようか？多分、喜んで飛んで来てくれるよ！』

(やめろ馬鹿。意味ないだろ。)

『……ぶー。』

「フアントムブラスタードラゴン!!」

フアントムブラスタードラゴン、ソウルにブラスターダークがいればパワーは11000となり、味方リアガードをドロップ^{犠牲}すれば、パワー+10000、クリティカル+1と、単純だがかなり強いスキルを持っている。流石に序盤から使わないだろうけど。

「ダムドチャージングランス!!」

「は、うせやろ?」

使いおった！使いおったぞコイツ!!完全に想定外だった、まさか初っ端から使ってくるなんて、やばいな……せめてダメージ3……最低でも絶対4以内で抑えないと……負ける!!

「ファントムブラスターでブラスタ^{ヴァン}ターダ^{ガード}ークに攻撃!!」

ブーストはないからパワーは21000か、ここは……。

「グリムリーパー二体でガードね。」

グリムリーパーのシールドは10000だ。

これでパワーは30000になる。ここでトリガー二貫されたらキレます。マジで出ないでね。

「ふふ……チェックザドライブトリガー……、1枚目」

めくったカードはファントムブラスタードラゴン、トリガーじゃない。

「ふいー……」

「ゲット、クリティカルトリガー。」

「デスヨネー。」

2枚目はやっぱり引いてくるよね。うん、読めてた。

「効果はすべてルゴスに。そのルゴスでアタック！」

よし、ここはノーガードで2ダメージ受けて、次のネヴァンをガードしよう。トリガー出ればラッキーだしな。ドロートリガ辺り狙うか……。

「ノーガードで。ダメージチェック、1枚目………トリガー無し。」

1枚目はマーハちゃん、可愛いよね。俺は渋々ダメージゾーンにカードを置く。そして、2枚目……

「はあ!?!」

「ぷっ」

2枚目は『アビスヒーラー』、はい、ヒールトリガーです。

「なにわらってんだよ、見せもんじゃねえぞ（震え声）あ、パワーはヴァンガードな。勿論、ダメージは俺の方が少ないので回復できませんでしたクソが。」

「ふっ、ふふふ……じ、じゃあ、ジャベリンのブーストを受けたネヴァンでルゴスを攻撃。」
「ノーガード、あといつまで笑ってんだよ（半ギレ）」

「ターンエンドです。……ふふっ」

レンのツボがよくわからん。

「ブラスタターダークでヴァンガードにアタックね。」

「グリムリーパーでガード。」

私はダメージ5で守りきった。いや、これもPSYクオリアのイメージ通りだ。そしてこれが……

「ファイナルターン。」

このターンで終わらせる。PSYクオリアがそう言っているのだ。

そして、さつきまでへらへらしていた様子は消え、彼の表情も真剣になる。だが無意

味だ、勝負は既に決まっている。そして、私は光っている手札の左から二番目のカードを手取る。

「……影の宮殿の奥に潜む、法に縛られぬ者どもの支配者。……ライドザヴァンガード。」

「ザ・ダークデイクテイター。」

「……ッ、こいつかよ……！」

彼も苦虫を噛み潰したような表情をする。想定外だったようだ。

「……コール。」

私は前列にブラスターダーク、ファントムブラスタードラゴン、その後ろにカロンをコールした。

「フフ……、これでリアガードが全て埋まった。ダークデイクテイターのスキル。リアガードのシャドウパラディン一体につき、パワー+2000だ。つまり、合計……」

「10000アップ……！」

「そして、カウンターブラスト。ブラスタードークとファントムブラスターにパワー＋5000だ。」

これで準備はすべて整った。

「……行くぞ。まずはジャベリンのブーストを受けたブラスタードークでファントムブラスター（V）を攻撃！」

パワーは合計20000だ。

「ノーガードだ。ダメージチェックね、……ノートリガー。」

これでダメージ4。これも予想通り。

「ふふ……これならどうです？ダークデイクテイターでアタック！」

「一枚捨てて完全ガード。」

彼はマクリールを出してきた。……完全ガードを持ってたのか。

「……チェックザドライブトリガー、1枚目、クリティカルトリガー。効果は全部ファントムブラスタードラゴン。」

1枚目はグリムリーパー……クリティカルトリガーだ。そして……

「セカンドチェック………ふふ、待ってたよ。」

私はカードをめくる。

「ダークサイドトランペッター、スタンドトリガーだ。」

これで私の攻撃はあと二回に増えた。これで決まった。

「ブラスタードークをスタンド、パワーはファントムブラスターに!!」

「ッ!!」

「………終わりだ。カロンのブースト、ファントムブラスターでヴァンガードにとどめの一撃をッ！」

ダークデイクテイターのスキルとトリガー2枚、そしてカロンのブーストを合わせて合計パワーは33000となる。

……勝った！

「……………ダークサイドトランペッター、カロン、マーハちゃんデガード……………、そして、ブラスタードークのインターセプトだ。……合計パワーは36000。攻撃は通らない!!」

「何ッ!!?」

ファントムブラスタードラゴンの攻撃を防がれた……………PSYクオリアの導きのおりにならなかった……………だと?」

「……プラスターダークでアタック。」

「ノーガードだ。」

「何故……、何故PSYクオリアの導きのとおりにならないッ!!? 何故お前はそんなにガードできるカードを持っていたッ!!?」

「……簡単だよ。お前がこのターンで決めてくることはわかってたから、このターンのためにガード要員を温存してた……それだけだよ。まあ、保険でダメージ3に抑えたのもあるけど。序盤のアタック防ぐのにそんなにユニットを使わないからな。」

「お前はPSYクオリアを使ったんじゃないのか……ッ!!?」

「……ああ。」

彼は苦笑いを浮かべる。

「もし俺が使ってたなら、もうファイトは終わってるよ。」

「お、終わってる……って……………」

「いや、言葉の通りダメージ6でレンは負けてるってことだよ。」

負けてる……………だと……………!?

「何故だ……………!」

「ん?」

「そんな絶対的な力があるなら何故使わない!?!勝てるんだぞ!?!」

「はあ……………、だからさ、自力で勝たないと達成感もなんもないでしょ?別にPSYクオリアをズルって言ったりする気は無いけどさ、ただ勝つことだけにこだわるのもどうかと思うよ?トシキが言いたかったのはそういうことじゃないのかな。」

トシキは勝つことにこだわっていたんじゃない、本気で戦うことにこだわっていたんだと思う。その少しのズレがトシキとレンの関係を崩したんだ。

「さて……………」

さて、どうしようか。守りを意識するあまり守り切った後のことを微塵も考えてなかったぞ?手札は一枚しかないしなあ……………。カッコつけたこと言ってた俺もかなり笑えない状態ではあるんですわ(震え声)手札温存するためにユニットを全然コールドして

なかったからヴァンガードのファントムブラスターとその左後ろのジャベリンしかないんだが、これドロでいいカード引かないと火力不足で終わるね（自分が）

「スタンドアンドドロ。」

俺は内心いいカードを引くよう祈りながら山札を引いた。

「…………ツ!!」

来た。

この状況で、このタイミングで、このカード。

運命すら感じた。

……………これならいける。

「…………この深淵の闇は災いをよび、やがて世界を覆い尽くす、その最凶のチカラをもって全てを無に帰せ!!」

俺はカードを掲げる。

「クロスライド!!」

『……あとは任せて、ハルト。』

相棒^{カノジョ}はその禍々しい大剣を握りそう力強く言った。

「……漆黒の破壊者^{デストロイヤー}　ブラスターダーク　　t h e ・ D i s a s t e r ! ! !」

「何ツ……!?なんだそのユニットは!?新しいブラスタードークだと!!?」

レンは驚愕の表情を見せた。

『ア……ハ……♡ハルトに憑依ライドしてるよお……♡ひとつになってる……ツ♡』

ブラスタードークが頬を赤らめ恍惚とした表情を浮かべる。

……あれ、これPSYクオリア発動してないか?この自分もヴァンガードと一体となっている感覚……。

『えへへ、このカードD i s a s t e rにライドしたら強制的に発動するようになってるんだあ♡』

……マジか。

「……呼び寄せるなよ?」

『わかってるって……、ハルトに嫌われちゃったら私……生きていけないもん……♡』

「ふふ……いくら新しいユニットにライドしようともあなたの手札は一枚です、守りきれ……守り切ってみせる!!」

レンは力強くそう言い放ったが、このユニットはこの状況のとき力を発揮する。

「……ソウルにプラスターダークがあるので、パワーは常に+2000され、13000となる。」

「そして……ペルソナブラスト」

俺は手札の残り一枚のカードをドロップゾーンに置いた。

「……ッ!!」

『よーし! 五体のユニットたちよー、戦場に集えー!』

ブラスタードークは剣を天に掲げた。

「アビスヒーラー、ブラスタージャベリン、バイヴ・カー、ネヴァン、ドランバウを山札からスペリオルコール。……元からいたブラスタージャベリンは退却ね。」

ブラスタードークThe Disasterは自らをドロップゾーンに置くことで山札の上から5枚をスペリオルコールできる。

彼女の糧となるために

『よーし！みんな集まったねー！それじゃあー……』

彼女の剣は貫いた。

仲間達を

『私ハルト
の
為
に
死
ん
で
ね
』

冷酷に

残酷に

無残に

無慈悲に

貫いた。

『アハ……♡アハハ……♡』

彼女は笑う。

口角を三日月のように吊り上げ

笑う。

血に染まったような赤い瞳に狂気を宿らせて

『アハハハハははハハハハハははハハハハッ!!!』

嗤った。

「……退却させたユニット一体につき、パワー+4000、俺が退却させさせたユニットは5

体、よってパワーは+20000だ。」

「グツ……!!」

レンの表情が厳しくなる、だがまだ終わりじゃない。

「まだ終わりじゃないぞ、このスキルで退却させたユニットの数が4体以上ならクリティカル+1だ。」

「…ツ！」

「そして……」

まだ……悪夢は終わらない。

「退却させたユニットが5体なら、お前はグレード1以上でガードすることが出来なくなる!!」

「な……………ッ!!?」

これでレンのリアガードのプラスターダークはインターセプトが出来なくなった。あいつの手札は二枚、『グリムリーパー』と『ダークサイドトランペッター』だ。合計シルド値は20000、パワーが33000になったプラスターダークには到底及ばない。

「…終わりだ。プラスターダークThe Disasterでヴァンガードにアタック。」

「……………私の……………負け……………？」

「ああ、俺の勝ちだ。」

俺はデツキをケースに戻した。

「認めない……………！私は絶対にお前を認めないツ!!それでも私のこのチカラが間違っていたなんて……………絶対認めない……………!!」

「次は……………ツ!次こそはこのチカラをもってお前を倒す……………!!木崎ハルト!!」

レンは鋭い目で俺を見た。その目は憎悪で満ち溢れているようだった。レンはデツキを直すそのまま出て行ってしまった。

「……だめだなあ、やっぱ俺なんかじゃ説得は無理か。」

俺は天を仰いだ。なんとなく無理な気はしてたからいいけども。

「後はお前がなんとかするしかないぞ、トシキ。」

「……若き日の王の姿を見よ!!」

「ライドザヴァンガード !!アルフレッド・アーリー!!」

俺はあいつからもらった切り札を出した。そして、もう一つのスキル……

「そして、ソウルからスペリオルコール!!」

リアガードに光を放ちながら現れたのは……

「ブ、プラスター……ブレード……!!」

アイチは明らかに揺れている。これなら勝てる!!

「……お前のデッキだ。」

俺はロイヤルパラダインのデッキをアイチに返した。

「……うん……！」

アイチはデツキを大事に抱きしめた。

やっと……、俺はP S Yクオリアを止めることができた。俺は……強くなれたのだからか……、このチカラでレンを止められるのか？

『P r r r r r r ……』

ポケットから着信音が聞こえたので携帯を取り出して開く。

「…ハルトか。」

『おつ、出た出た。どうだった、止められたか？』

「……ああ、お前のアルフレッドアーリーが生きたよ。」

『そうか、ならよかったよかった。』

「……アイチのデツキに溶けたけどな。」

『……あー、デスヨネー。やっぱり渡つちやったかあ、まあ、ロイヤルパラディンおかえり記念でプレゼントしちやおうかな。』

「……で、そつちはどうだった。」

『……フ・ア・イトには勝ったよ。』

「何……ッ!?!」

『でも止められなかった。てか、嫌われちゃったよ。』

ファイトでレンに勝ったのに止められなかっただど……!?

『やっぱり、純粹に自分の力で戦ってるお前が止めるしかないぞ。』

「ツ……!」

俺がやるしかない……!ハルトはそう言い放った。

「わかった。明日その時のことを教えてくれ。」

『りよーかい、やる気になってくれるなら良かったよ。じゃあ、俺は帰りますかね、また明日な、トシキ。』

そう言つてハルトは通話を切った。

「レン……、俺が絶対に……止めてみせる……!!」

そして一枚のカードを取り出す。

『ドラゴニック・オーバーロード ジ・エンド』

進化した俺の新たな分身を見つめ、強く決意を抱いた。

第4話

俺は気がつくとき暗く薄気味悪い裏路地のような場所にいた。まあ、多分ここはクレイのどこかなんだろうけども。

惑星クレイには信仰と科学技術を融合させた正義と秩序を重んじる神聖国家『ユナイテッドサンクチュアリ』が存在する。そこではロイヤルパラダインが主となり、日々クレイの秩序を守っている。

しかし、表上ロイヤルパラダインが活躍しているように見えるが実際はそうではない。裏で暗躍しているクランも存在する。

それが『シャドウパラダイン』だ。

彼らは表に出て動くことはほとんどなく、秩序を保つためにも陰で静かに動いているのだ。その中には汚れ仕事もあつたりなかつたりするとか。うん、その辺は踏み込んだらマズイ気がするからあまり気にしない方がよさそうだ。

「ん、静かに陰で動いてる反乱分子とかがいたら消して回つたりするかなあ。偶に『ぬばたま』の人たちの力も借りたりすることもあるねー。あの人たちは機動力や隠密性に

関しては群を抜いてるし。まあ、本職じゃないっぽいやからあんまり力を貸してくれないけど。」

「うおっ!？」

突然後ろから声が聞こえてびっくりして振り向くとそこには少女が立っていた。

「えへへ、おまたせハルト〜」

黒のワンピースを着こなし、灰色の長い髪に緑の瞳。そして、このほんわかとしたような口調。

「ブラスタードークか。」

「ぴんぽーん、あつたり〜!」

鎧を着てなかったから一瞬わからなかったわ。こんなに変わるもんなんやなって思ったね。ブラスタードークは嬉しそうに抱きついてくる。ああ、やつぱ女の子だなあ。全体的に柔らかくていい匂いがするし……（達観）

「えへへ……ハルトの匂い好き〜♡」

「ていうか、こんな薄着でいいのか？鎧つけてないけどさ。」

「いいのいいの、あの鎧着るときはサラシ巻いて胸をつぶさないと着られないんだよね、

ほんと苦しくてたまったもんじゃないよ。進化クロスライドしたときは鎧が私にびったりだから、サラシはいらないけどね。……それにここはシャルドウトハルトのパラディンデッの管轄だからハルトを襲う輩が現れるなんて天地がひっくり返ってもあり得ないよ。あ、襲う（意味深）の方は現れるかもね……自分も含めて♡」

「え」

「んっふふっ♪さ、行こっ、ハルト♪」

なんか誤魔化された気がする。

「行こつてどこへ？」

「ん、そうだね、まあ普通に私たちがいつつも集まってる場所かなあ？」

俺はブラスターダークに手を引かれてどこかへ連れていかれた。

「ここだよ。」

俺は古びた建物の扉の前に立った。

「ん、ここは何する場所だ？」

「えー、そんなの飲む場所に決まってるじゃーん。」

酒場かよ!!!

「ええ、俺飲めないぞ？つてか俺の年わかるよな？」

「16年と2ヶ月3日と……えつと、何時間何分だったっけ……？あー、こういう細かいことはカロンが覚えてるんだよね、あとで聞いておくかなあ。」

「おい、なんでそこまで細かく知ってるんだよ。年齢聞いたのに細かく答えられて困惑してるんだけど。」

「ええー、もー、ロイヤルパラディンの奴らのことは知らないけどシヤドウ^わパラ^たディン^ちは大体記憶してるはずだよ。義務だし。」

「なんでや。」

もう驚きを通り越して恐怖しか覚えねえよ、義務つて何やねん。

「そんなことどうでもいいでしょ？早く中に入ろ〜！」

彼女が後ろから背中を押して店の中に強引に入れてくる。てか、胸が……！

「やつほー、おまたせみんなー。」

「ブラスターダーク！遅いですy……………って、は、はははハルトさん!」

ガタツと顔を真っ赤にして席から立ち上がるのは『漆黒の乙女 マーハ』だった。声でかくてビックリしちゃったよ。あと可愛い。

「あら、ハルトじゃない、やつときてくれたのね♡」

更に色白な肌に露出の激しい格好、そしてなによりも胸に大きい双丘を持ち、透き通るように透明な頭蓋骨を手に持っているのは『髑髏どくろの魔女 ネヴァン』……………でかい(でかい)。

「マイヴァンガードか、久しいな。」

そして、ゴツイ鎧を着こなし……………てはいないが、上の鎧と兜を外し、インナー姿になっているのは、シャドウパラディンを統べている(らしい)『ザ・ダークディクテイター』だ。

他にも俺のデツキに入っている面子も何人か見受けられた。

直ぐにみんな俺の周りに集まり、楽しく飲んだりしながら談笑に浸っていた。

「そーそー、マーハはねー、毎日夜寝るときに手作りのハルトのぬいぐるみ抱きながら寝てるんだよねー?」

「は?」

「ぴゃあああああッ!!……ちよっ!ちよっと言わないでくださいよう……//」

真っ赤にしている顔を手で隠しているマーハちゃん、どうやらマジらしい。

「で、そのぬいぐるみ抱いてないと眠れないんだよねー?」

「う……うう……//」

うずくまるマーハちゃん、恥ずかしさで耳まで真っ赤になっている。え、それもマジなの???

「一回こつそりマーハのぬいぐるみを隠してみたらさ、最初は普通に探してるんだけど、だんだん余裕がなくなってきたのか涙声で喘ぎだしてね、『びえええええん!!!ハルドぎあああん!!!』って大声で泣きながら地面にへたり込んでさ、流星に申し訳なく

なって返したよ。」

「あ……………ああ……………／／／／」

「もうやめて差し上げろ、マーハちゃんのライフはゼロよ!」

「…………ハルトさんだけには知られたくなかったのに……………」

「てゆうかき、マーハちゃんっていつもこんな感じなの?」

そう、なんかカードのイラストとテキストからわかる厳しいカリスマ性が感じられなかったからね。しかも敬語だし。

「…………オフなので。」

「お、おう……………」

目を真っ赤にして言うマーハちゃん、オフになると敬語になるのね…………。

「でもねー、マーハはねー、戦闘中にビビると素が一瞬でてるんだよねー、『ぴやつ』って声出しててかわいいよー?」

「それです。この前、ドラゴニックオーバーロードに背後取られた時のマーハさんまさしくそれでした。顔真っ青でしたし。」

「う……………」

ビシッとブラスタレイピアが指摘する。

「む…………、そもそもドラゴニックオーバーロードに背後取られるって時点で隙だらけな

んじゃないのかマーハ？」

「うう……。」

デイクテイターから更なる追い討ち。

「でも、戦闘中の指揮や指示はブラスタードークの次くらいに的確だと思わよ？」

「……!!」

ここでネヴァンの救いの手、マーハちゃんの目に光が戻る。

「いくらの確な指示が出せていたとしても緊急時に冷静さを失うようではいけないと思いますけどね？」

ここで再びレイピアの指摘、………結構辛辣だなレイピアちゃん。

「いつ、いやー！ブラスタードークが可笑しいんですよ!!何ですか、アイツ敵を笑いながら切り裂いてるんですよ!!サイコパスじゃないですか!!この前だつて平気で味方を刺してましたし!!」

「えへへ、いやあ、あのときはハルトに憑依してたし進ライド化もしてたからさ、ちよつと気分が高揚しちゃつて……ね？」

でも高揚してたとはいえ、あんな狂つたような高笑いで味方貫くのは流石に怖かつたけどな!!!

「なあ、お前らつて結構味方を犠牲にすることが多いけどさ。そのことに関して何か思うこととかあつたりすんの？」

すると、全員が黙り込んだ。

「……んー、そうだね。特に思うことはないかな。」

「そうですね、私たちに仲間意識は勿論あります。やっぱ同じクランとしてどんなことであろうと戦ってきましたから。……だとしても、仲間を犠牲にすることに関して思うことはないですね。」

「我々シヤドウパラディンの本質は『他人を犠牲にすることで圧倒的な力を得る』ことだからな。犠牲で初めて成り立つことも多いからな、多分周りの奴らも納得してると思うぞ。……まあ、そういう面では本当に私は異質だよ。」

ディクテイターは自嘲するように笑う。

「んー適材適所だからねー、そういうバランス的な人がいてもおかしくない、寧ろいた方がいいと思うよ。居てくれて助かることもたくさんあるしねー。」

ブラスタードークのフォローが入る。それを聞くとなんだかんだ言ってもやっぱり仲間なんだなって思うよね。それ聞けただけでも良かったよ。

「ん、そういうえげね、最近ロイヤルパラディンと争ってるみたいなんだよね。意見が合わないみたいでさ、そりやそうだよね。」

「え、やばくないか？てことは今はブラスタブレードたちと……？」

「いつのまに抗争とかやってたんだよ、全然気づかなかったわ。」

「あはは、だいじょぶだよハルト。私たちの組織は不干渉を示してるからね。その辺の抗争はおにーちゃんの差し金だと思うよ。」

「最近、謎の勢力がクランを覆い始めてるらしくてな、それを止めるべく全クランの代表者が集まって会議を開いていたんだ。しかし、主になつていたロイヤルパラディンとシヤドウパラディンの意見が合わなくて、会議がまともに進まなかったらしい………で、他のクランは戦って勝った方のクランに従うと意思を示したんだ。だから、今現在争いあってるってことさ。」

「……お前らは参加しなくて良かったのか？お互いのプライドのかかった戦いだと思うんだが。」

「……じゃあさ、仮に私たちが戦いに参加したとしてハルトはどちらを応援してくれるの？」

「……それは。」

答えに詰まってしまおう、ブラスタードークは柔らかな笑みを浮かべて言った。

「……ハルトはロイヤルパラディンとシャドウパラディン両方の先導者なんだよね、困るでしょ？ たしかにシャドウパラディンとロイヤルパラディンの考えは全くの真逆なんだよね、でもハルトのデッキのユニットたちは違う。クレイのことよりもハルトの方が……、こんなしょうもない争いよりもさ……。」

ブラスタードークは俺の腕に抱きついてくる、その時の彼女の表情は幸せそうだった。

「……こーやってハルトと一緒にいる時間の方が大事だからね、えへへ……♡」

「それに……私にはこのチカラがあるから。」

ブラスタードークは片目を開く、その目は赤く染まっていた。

「……進化か。」

「そう、私は味方を犠牲にすればするほど強くなれる。もし、ハルトとわたしたちに危険

を及ぼすくらいまでにその勢力が大きくなっているのならば……。」

全て根絶やしにするから。

彼女は、抑えてはいるもののその膨大な殺気を放ちながらそう言い捨てた。

「アルフレッドアーリーが欲しい。」

「……知るか。」

俺は机に突っ伏しながら言った。

「あ、あ、別に先導クンにあげたことは後悔してないんだよ、俺も陰ながらQ4応援してるし？でもさー、アルフレッドアーリーがいなくなつたお陰でデッキの枚数足りなくてさ。別に騎士王の方使つてもいいんだけど、ソウルからブラスタブレード呼べるのって強いじゃんか？」

「……まあ、そうだな？」

「しかもアレってさ、パックで登場しないカードじゃないですか？どーやって手に入れろってんだクソが。」

「……はあ、だったら素直にアイチに返してもらえばいいだろう。」

トシキはため息混じりに提案した。

「でもさ、一度あげちゃったし、今更返せなんて言えるわけないだろう？」

んー、もう単体で売ってるやつをかうしかないのか……。いくら溶けるんだろ。

「……トシキ。」

「なんだ？」

「この辺カードショップないの？」

「キャピタルに行けばいいだろ。」

「だってあそこQ4の総本山じゃないですかー、気まずいわー。」

「……あそこなら店長がレアなカード集めてるから持つてる可能性があるぞ。」

「……マ？」

「ああ。」

マジか、そんなコレクターがいるなら何とか土下座して頼み込んでみるかなあ……。

「わかった、行こうか。あ、場所わからんから案内よろ。」

「……………はあ、後でファイトしろよ?」

「ok ok。」

なんやかんやあつてそのカードショップキャピタルとやらに行くことになったんだけども。

「てかお前さ、全国大会全然出てなかったけどさ、何してたの?学校には毎日来るくせに。」

そう、全国大会の予選では先導クンのシャドウパラディン無双時代だったのだ。結構チーム内でも荒れてそうだったけど、こいつ居なかったんだよな。

「……………お前には関係ないだろ。」

「本戦は出るよ?」

「……………当たり前だ。」

「ならよろしい。」

あーいいいなー、俺もそういう大会出てみたいよね。チームカエサルの光定ケンジなん

俺は店長？に伝家の宝刀『土下座』をお見舞いした。

「いきなり店に入ってきて土下座ってなんだよ、きめエンだよッ!!」

「グボアッ!!」

なんか急に罵られて土下座して守られてるはずの鳩尾に何故か蹴りがぶちこまれて吹き飛ばされる。

「げほっ!げほっ!?!……トシキ……この店ヤバ……イ、げほっごっほ……!入店3秒でいきなり蹴り飛ばされt……ゴホゴツホ……、やべ……、やべえよ……、Q4の総本ざ……。」

「ちよ、ちよつとミサキ……お客様をいきなり蹴り飛ばすなんて、失礼ですよ!」
「シンさん、コイツ早く出禁にしたほうがいいよ。」

なんで!?

「……トシキがここの店長はレアなカード集めてるって聞いたので来たんです……、ちよつとした事情でアルフレッドアーリーをトシキの友達にあげちゃったのでデッキのカードが……ゲツホ、ゴツホ!!……だから、言い値で売ってくれませんか……、10万

「までなら出しますので……！」

「じゅっ、10万!!！」

「正気……!?!」

俺は貯金から何とか生活費やらいろんなものを考慮して捻出できたのがこの10万である。明日からバイト生活確定だよチクシヨウ。

「あ、あの……、もしかして、權くんの友達ってあなたの事ですか……?」

ふと顔を上げると不安そうに覗く青髪の少年……、ああ、彼が『先導アイチ』くんか。

「……ああ、コイツがアルフレッドアーリーを入れた張本人だ。」

トシキが答える。

「そ、その……、お返しします！ごめんなさい、貴方のカードだったなんて知らなくて……!」

先導クンが申し訳なさそうな顔でアルフレッドアーリーのカードを差し出してくる。

はあ、そんな泣きそうな顔するなよ……。

「いや、それはもう君の物だよ。あげたことに関しては別に後悔もしてないからいいんだ。」

「で、でも……。」

「いいから貰つとけ。」

俺は先導クンの手を押し返した。

結果、なんとか頼み込んでアルフレッドアーリーを2万で売ってもらえた。すごく安くして一瞬店長が神様に見えたわ。いや、神だわ（確信）

「あー、よかったあ……、結構安価で手に入って本当良かった。」

「2万って安価なんですかね……」

「10万は覚悟してたんだから、めちやくちや安いほうだよ。」

「アルフレッドアーリーを持ってたつてことは木崎さんはロイヤルパラディンを使ってるんですか？」

「そうだな、ブラスタブレードをソウルからコールできるから結構重宝してたんだ。」

「そう言つてアルフレッドアーリーのカードをデッキに入れた。これでとりあえず完成だ。」

「…ハルト、ファイトするぞ。」

トシキが懐からデッキを取り出す。

「おっけー、約束だしな。」

近くのファイトテーブルにデッキを置き、山札から5枚引いた。

「……お前の昨日のレンとのファイトのこと、洗いざらい吐いてもらおうぞ。」

「警察の取り調べかよ。……まあ、いいけど。」

「スタンドアップ、(ザ)、ヴァンガード。」

「フルバウ。」

「リザードソルジャーコンロー。」

「ライド、ブラスタージャバ…」

「木崎ハルトはどこだア!!?」

突然自動ドアが開いたかと思ったら黒服の男が5人、店に乗り込んできた。

「なんだなんだ!？」

「……ヤツだ、捕らえろ!」

黒服の男たちの後ろにいた男、あれは……。

「……テツ。」

トシキがぼそつと言った。

「久しぶりだな、權。」

お互いに睨み合うように言葉を交わす。……どこか棘あるけど。

「……こんな店に何の用だ?それに、用があるならこいつ^{ハルト}じゃなくて俺じゃないのか?」

「残念だが、今回は木崎ハルトに用があるのだ。」

「何故だ……?」

心当たりは……、んー、あー、心当たりしかねえわ。

「ヤツはレン様にファイトで勝利した。その結果レン様は病んでしまわれたのだ。」

「は??？」

「……なに？」

え、あの後レン病んだの？どれだけシヨックなんだよ!!?

「だからコイツを借りていくぞ。………連れて行け。」

いやいや、だから連れて行くってどういう意味だよ!? 『だから』の単語の意味わかってんの!?!心当たりはあるけども!!

「ハッ!!」

黒服の男二人に腕を掴まれ、引つ張られるように連れていかれ……

「あつ、ちよつとまって!!デツキだけ!デツキだけ取らせて!!その後は自由にしていから!!」

流石にデツキを置きっぱにするのはあかん。もし仮にフーフアイターどもにフアイト挑まれてもどうしようもできないもん。

黒服の男の足が止まる。

「トシキ、俺の鞆を投げてくれ。」

「……ハルト。」

「大丈夫だって!この人も借りていくって言ってただろ?返してくれるさ。」

「……。」

トシキは黙って俺の鞆を投げた。俺はそれをうまくキャッチする。

「……連れて行け。」

「はっ!!」

俺はトシキに鞆を貰った後すぐに男たちに車に乗せられ、テツとともに連行されていった。

第5話

俺は車に乗せられて、フーフアイターの本拠地へ連れていかれていた（多分）

「……レンが病んでるってマジ？」

「ああ、夕方頃に戻って来られたんだが……」

私が普段通りレン様の部屋で執務をこなしていたときのことだった。

……ああ、こういう細かい運営などの管理は全て一任されているからな。レン様には無理だ。

扉がゆつくりと開いた。ノックがないから誰かは直ぐにわかったよ。

「…おかえりなさいませ、レン様。」

「……テツ。」

レン様だった。お疲れになられていたのか、かなりフラフラしていたのだ。

「……た」

「…レン様？」

「……負けた……!」

「……ッ!？」

レン様は目を見開き、少し震えながらそうこぼした。

「このチカラは……このチカラは最強、無敵のはずなのに……!」

「……………木崎……………ハルト……………!」

ああ、そこでお前の名前が出てきたわけだ。私も驚いたよ、レン様を倒したのが權トシキじゃない別の人物だったのだからな。

……………權?

…ああ、レン様を……………、レンを止められるとしたらもう權しかいないと思っていたからな。

「この屈辱……………!絶対に……………晴らす……………ッ!!」

レン様の心はお前に対する憎悪で燃えていたんだろうな、私でも恐怖したよ。こんな怖い表情をしているレン様は初めて見た。

だが、もっと様子がおかしくなったのはこの後だった。

レン様が椅子に座り、デッキのカードを机に広げたときだった。

「……………あ……………!?……………あ……………ああ……………!!」

レン様が突然頭を抑えて、苦しみだしたのだ。

「レン様!?大丈夫ですか!」

私は直ぐに駆け寄ったよ。レンのこんなに苦しむ表情は初めて見た。

「テ……………ツ……………!」

一瞬俺を見たんだ、でも次の瞬間……………

「……………あ……………!!……………ああ……………!見るな……………!やめろ……………!」

「急変した原因は間違いなくお前にあると思ったからな、なんとか探し出したってわけだ。」

赤い目……………、あいつか……!!

俺の脳裏でアイツが『てへぺろ☆』ってしてるのが思い浮かんだ。

「……で、俺をとっ捕まえてどうするつもりなの？ 心当たりはあるにはあるけど、普通にフアイトしてただけだしな。」

「心当たりはあるんだな。まあ、別にそこまで恨んではないさ、悪意がないのはハッキリとわかるしな。」

「そこまでつてことは、少しは恨んでるんだな。」

「これでもレンとは長い付き合いなんだ。やっぱり友が倒れたとなると少しは……な。」

レン……………、こんなに想ってくれているダチがすぐそばにいるのに……つくづく可哀想なヤツだな。……まあ、その辺はトシキがなんとかしてくれるか、アイツもレンの大事な友達だからな。

「ちなみに心当たりってのはこのカードのことね。」

俺はテツにあるカードを渡した。

「なんだ……!?!このブラスターダークは……!!」

テツは目を見開いて驚く。

俺が渡したのはレンにトドメを刺したユニット、

『漆黒の破壊者 ブラスターダーク The Disaster』だ。

「お前はレンの能力知ってるだろ？」

「……ああ、PSYクオリアのことだな？」

「俺も持ってるんだ。」

「なに……!?!」

「ま、俺は滅多に使わないんだけどね。でもさ、このユニットにライドしたら強制的に発動しちゃうんだよね。」

「何故お前はそのチカラを使わないんだ？」

もう何度目かわからないくらい聞かれた質問だった。だが、答えよう。

「そうだな、俺ってさトシキと考えは似てるんだよね。」

「權と……？」

「ああ、P S Yクオリアを使うとほぼ確実に勝てちゃうんだけどさ、やっぱり自分で考えて勝つ方が楽しいじゃん？ トシキの言う本気のファイトってのはそういうことだと思っただけ。だからさ、出来るだけというより殆どこのチカラって使わないんだよ。楽しくないし。」

「……そうか。」

テツはフツと笑みをこぼす。

「そんなお前に頼みがある。」

テツが再び真剣な表情にもどった。

「………流石にレンを止めるのは無理だぞ？ 勝つても止められないならもつとシキに頼るしかないさ。」

「その件はいいき。權がなんとかしてくれるだろう。」

「なんでそう思うんだ？」

「權の側にはお前がいる、きつとP S Yクオリアをどうにかする方法も伝授しているんだろう？」

……流石、フーフアイターで將軍ジェネラルと呼ばれるだけはあるなと思った、いや、思わされた。洞察力の塊かよ、推察が鋭すぎるわ、ナイフかよ。

「まあ、毎日フーフアイトに付き合わされてるよ。」

「…やっぱりな。」

半分呆れたように笑うテツ。

「まず聞くがフーフアイターの構成チームのチームA L 4は知ってるな？」

「そりゃあ、前年度優勝チームなんだから知ってるよ。」

「AL4に入ってほしい。」

「は？」

え、こいつ今なんて言った？

「ごめん、聞き間違いかもしれない。もっかい言ってくんね？」

「AL4に入ってほしい。」

「……………マ？」

やべえ、聞き間違いじゃなかったわ。とんでもないこと頼まれてるわ。

「なんで急にAL4に？メンバーいるだろ。」

「緊急事態でな、レン様は今療養中だ。」

「うん、それはわかっているけどさ。それでも後二人いるでしょ、青髪の子とトシキにボコられた白い子（語彙力）」

「……キヨウは全国大会で唯一の敗北を喫した。だから、AL4から除名、及びフーフアイターから追放の処分を受けたんだ。」

「うっわ、きつびしいなあ。」

マジか、一敗で全て終わるとか怖すぎるだろ。これって、相手が相手だったから負けるのも仕方ないと思うんだけど。

「フーフアイターに負けは許されないからな。」

「うん、その辺の考えはちよつと理解しかねるかな。………で、青い子は？」

「アサカはレン様が倒れた頃から体調を崩してる。今は療養中だ。」

みんな療養中やんけ、あかんやろ。

「アサカはレン様を溺愛してるからな。精神的ショックが大きすぎたんだろう。」

「……あー。」

「AL4でまともに機能してるのが私しかいないんだ。これでは大会にすら出場できない。」

「……フーフアイターって、AL4だけじゃないんだろ？他のチームから連れてくれば

いいじゃん。」

「傘下のブリリアントスターズがあるが、2番目とはいえAL4には遠く及ばない。AL4に入るにはかなりの実力が必要なのだ。……だが、今は緊急事態、AL4でも通用する即戦力が必要だ。」

「………そこで俺、と。」

「んー、そこまで強くないんだけどなあ、トシキにも負ける時は負けるし。レンとのファイトではPSYクオリアだけを警戒した立ち回りをしてたから楽に勝てただけだし。」

「そうだ、お前はレン様を倒している。レン様をあんな状態にした張本人とはいえ、悪意がなかったというのは十分にわかった。」

「あつさり信用してくれるんだな。」

「…ああ、自慢ではないが洞察眼には自信がある。フーフアイターに入れとは言わない、レン様とアサカが戻ってくるまでの間でいい。戦ってくれないか?」

「周りから反感を買うかもしれないぞ?」

そう、急に入ってきたヤツが急にフーフアイターのテツペン、AL4に入ったとするとそれまでそこを目指して必死に頑張ってきた下のやつらの反感を買いかねない、てか、多分買うわ（確信）

「心配ない、私はお前の実力を買って頼み込んでるんだ。もし、突つかかってくる輩がいたらお前のPSYクオリアを使って適当にあしらっておけばいい。」

そうだなあ、たしかにめんどくさいファイトを申し込まれたらPSYクオリアで適当に倒しておけばいいか。

「……おっけー、入るよ。よろしくなテツ。」

俺は一時的だが、AL4に入ることを決意した。よくよく考えたら全国大会にいきなり出場出来て戦えるんだ、そんなうまい話ないよな。

「ああ、よろしく頼む、ハルト。」

俺とテツは強く握手を交わした。

よし、全国大会頑張るぞー！（小並感）

「ブラスタードークの斬撃の所為でレンにトラウマ植え付けちゃったみたいでさー。」

「……………」

「レンが寝込んでるみたいなんだよ。それで、緊急で代わりに俺が出場することになったわけ。」

「……………」

「いやー、まさかこんな大舞台に出られるなんてほんと嬉しいわ。夢にも思ってたなかったなー。」

「ハルト。」

「ん？」

「確かにハルトが全国大会に出られたことは私も他の皆も嬉しいと思ってるさ、いや、嬉しいさ。ハルトの存在を、ハルトの力を周りに見せつけるいい機会だからな。」

「そこまで大袈裟なことは考えてないよ。単純に力試しをしたくてだな、まあ、負けも許されないけど。」

「ああ……、だが、そんなことは今はどうでもいいんだ。」

「私というものがありませんが、お前は他の女の子の話をするのか？」

ずいっと目と鼻の先の距離まで一気に顔を近づけてきたのは、腰あたりまで伸びた長い金色の髪に緑色の瞳、ダークの方とは真逆と言ってもいいほど厳しい口調をしているが、口調とは反して白いモコモコした柔らかそうなルームウェアを上半袖、下はショートパンツと中々可愛く着こなしている。風呂上がりなのか彼女からはシャープのいい香りがする。……すごい不機嫌そうなのは頬を膨らませてる表情からわかったかわいい（本音）

「待てブラスターブレード、一回待とうか。」

とりあえず思い切り地雷を踏み抜いたのは彼女の虚ろな瞳と表情からわかった。

ちなみにここは恐らく彼女の部屋だろう。白い壁に灰色のカーペット、ソファ、ベッドと、落ち着きのある部屋だと思った。彼女らしいといえば彼女らしい部屋だな。……パジャマは意外だったけど。

「何を待つんだ？ハルトがこの前ダークたちシャドウパラディンと楽しんでいたのは

知ってるんだぞ？……………私達のところには来てくれなかったのに。」

「…………それに、最近シャドウパラディンばかりを使ってるし…………そんなにダークの方が好きなのか…………？」

「い、いや…………。」

「…………私なんか、ダークに比べたら貧相な身体だし…………。」

「そんなこと…………。」

「…………私はダークとは違ってサラシなんかつけなくても鎧にすっぽりだぞ。」

「……………」

ブレードは自嘲するように苦笑いを浮かべながら自分自身の胸に手を当てた。うーん、別に気にするほど貧相でもないと思うけどなあ、人並みにはあるし。

「…ハルトはやっぱアカネやダークみたいな胸のあるヤツの方が好きなのか？」

「…なんでそう思ったし。ていうか、ブレードもスタイルはいいんだからそこまで気を落とさなくてもいいと思うぞ。」

すると、ブレードの表情が一気に明るくなる。

「本当!？」

「ああ、俺が保証するさ。」

「えへへ……、ハルト……♪」

顔を綻ばせて、ブレードが真正面から抱きついてくる。ほら（事実確認）、やっぱりあるじゃん（何がとは言わない）。

「ハルトの匂いだ……、ふふっ……♡」

そのまま俺の胸に顔を埋めるブレード。

「……なあ。」

「むぐ?（何?）」

「俺の匂いのどこがいいんだ?男だからいい匂いはしないと思うんだが。」

「……何をいつてるんだ。ハルトの匂いは嗅いでるだけで身体がハルトに包まれているような気持ちいい感覚になるんだ、クセになるよ。……もうハルトのいない世界なんて考えられないくらい。」

「…そうか。」

最期の一言は流石に大袈裟すぎる気もしたが、こいつらならあり得そうでちよつと怖くなった。

「ふふっ……♪」

「どうしてこうなった……。」

気がつけば俺は彼女に膝枕をされていた。うん、やっぱり女の子の太ももは柔らかくて気持ちいいね（中並感）。ブレードも満足そうな笑顔を浮かべる。

「……お前らロイヤルパラディンって、シャドウパラディンのことをどう思ってるんだ？ 争いあってるって聞いたけど。」

ダークに聞いたことをブレードの方にも聞いてみることにした。

「争いあってるのは私の兄さんと、ダークの兄の方だ。私とダークの組織はこの抗争については不干渉を貫いている。興味はないからな。あと質問の答えだが、シャドウパラディンの考えについては全くと言っていいほど理解できないよ、『仲間を犠牲にする』なんて可笑しいからな。犠牲を得て力に得るなどたかが知れている。……例外はあるが。だから、抗争に発展してるんだ、お互いに考えが理解できないから、意見が合わないから戦争に発展するんだ。その辺は地球の人間とも似てるんじゃないか？」

「……やっぱり分かり合えないのかな。」

「そんなことはない。少なくともハルトのデツキの者はロイヤルパラディンであれ、シャドウパラディンであれ理解してる、しようとしてるつもりだ。それに言ったはずだ、例外はあるって。」

「例外……？」

「ブラスタードークさ。アイツは本当に犠牲にした分強くなってる。しかも限度という

ものが無い。嫌でも理解させられたさ。……肯定する気もないが。」

「ブラスターダーク……彼女は進クロスライド化する事で圧倒的な力を得る。仲間を犠牲にすればするほど強くなる、という単純で最恐のチカラを、彼女の狂気と共に実感させられた。しかもその狂気は同じPSYクオリア使いである雀ヶ森レンに精神的ダメージを与え、再起不能に追いやってしまうほどである。」

「……だが。」

「私にも対抗するチカラはある。ダークだけに、シャドウパラディンに譲るつもりはなくない。」

彼女の目は鋭く真っ直ぐで決意に満ちていた。ダークとは違うその正義感の強さ、その強さを間近で感じる事が出来た。

「……まあ、その話は置いてくとして。」

置いてくんかい!!せつかくいい雰囲気だったのに!!

「シャドウパラダインの奴らと飲んでおいて、ロイヤル^わパラ^たダイ^ちンとは飲み明かさないのか?」

まだ根に持ってたのかコイツ。

「悪かったって……。今度ロイヤルパラダインで談笑しよう。……てか、毎晩俺が眠った後クレイのどこに出るかわからないんだから仕方ないだろ!」

「むー……。絶対だから……。?」

「わかってるって……。」

とりあえずロイヤルパラディンのメンツと飲み明かすことが確定しました、はい。

「あつ、あとな……。」

ブレードが思い出したように顔をあげる。

「アルフレッドアーリーのところにも顔を出してやってくれ。てか、ハルトが原因なんだから絶対行け。」

「え……なんで?」

「はあ……。」

ブレードが呆れたように大きいため息をつく。

「アーリーはあその後『ハルトに捨てられた』って泣いてたんだからな?新しくデツキに加

えられてなかったらどうなっていたことか……。」

あー……。、たしかに悪いことしたな。今度会って謝っておくか。

「ふあああ……」

ブレードと談笑をしていたら大きな欠伸が出た。あー、眠いわコレ。

「眠そうだなハルト。」

顔を覗きこむブレード。

「ああ、夜も更けてきたし、寝ようかな。」

「そうか、だったらココを使うといい。」

「ありがとう、じゃあソファァーで寝るとしますかねー。」

俺たちが座っていたソファァーで横になろうとした瞬間だった。

「……何を言ってるんだハルト？」

「え？」

気づけばブレードがとんでもない力で俺の腕に抱きついていて、彼女の俺を見る瞳はどこか虚ろだった。

「私のベッドで寝るんだぞ？」

「は
???」

ごめ、ちょっと脳内の処理が追いつかなかったわ。

「え……、でもしたらお前の寝るところが……。」

「だから、一緒に寝るに決まってるだろう。」

「は
???」

「ん？」

一緒に……………って、つまり一緒についてことだよな(？)

「ええ!?!いやいいよ!ブレードだってゆっくりしたいだろう!」

流石に添い寝は精神的に来るものがあるし…

「ほお……………、ダークとは寝てたくせに私とは寝てくれないのか。」

「え？」

なんでこいつダークにも同じことされたの知ってんだよ!?

「ふっ、凶星って顔だな。……お前は気づいていないだろうが、背中あたりから腰にかけてくらいか……。ダークの匂いが染み付いてるんだぞ？」

そう言って俺の後ろから抱きついてくるブレード、その力は強かった。

「……女は匂いに敏感なんだ。別にダーク相手なら浮気と思う気もないが……。なんでダークにはして、私にはしてくれないんだ？」

「……。」

普通にブレードの声のトーンが低くなってるんだけど、怖い怖い。

「まあ、思う気はなくても嫉妬はするよ。さあ、その染み付いた匂いを私の匂いで上書きしてやるから一緒に寝ようハルト。」

そう言ってベッドまで強引に引っ張っていくブレード。……ほんっと、その華奢な腕から一体どうしたらそんな馬鹿力がでるんだよ……。 (困惑)。

「はると……………♪」

はい、背中から思い切り抱きつかれて寝ております。この寝てる時の背中の中の二つの柔らかない感触はいつやられても慣れんわ。(2回目)

「どうだー、やっぱり俺の背中はいいかー? (適当)」

「……………」

「ん?」

「まだ、ダークの匂いが染み付いてる……………消さないと、早く……………!早く消さないと……………!!」

「ぐえっ!?!」

ブレードの抱きしめる力がぐっと強くなる。同時に背中の中の柔らかない感覚もより大きくなった。……………やっぱり貧相なんかじゃねえわお前(再確認)。

「……………お前って思ったより、嫉妬深いよな。」

「……………私も驚いてるんだ。初めてハルトと寝てるんだ、嬉しいさ。でもな、ダークの匂いが……………他の女の匂いがついてたら……………なんというか……………妬げちゃうんだよ。そして、自分が自分じゃなくなるみたい……………すさまじい焦燥感に襲われるんだ、怖くなるんだ」

よ。ハルトがいなくなるんじゃないかかって……。私は……。ダークほど寛大じゃないんだ……。ふふ、可笑しいだろう？」

「……そんなことない、大丈夫だ。俺はお前たちを……。お前を捨てたりなんかしないから。」

「……アーリーは捨てたの？」

う、そこ突いてくるかよ。

「元から別のを確保するつもりだったからな、捨てたわけじゃないよ。」

「ふふ……。わかってるよ。ありがとうハルト。」

そう言ってブレードは再び俺の背中に抱きつく。しばらくすると静かな寝息が聞こえてくる。……。眠ったようだ。

俺も目を閉じ、眠ることにしよう。現実で朝を迎えるために。

ヴァンガードチャンピオンシップ全国大会、ついにその日を迎えた。俺は：俺たちチームQ4はなんとしても勝ち抜き決勝へ、そしてレンを、チームALL4を倒さなければならぬ。俺は静かに足を進める。

俺は観客席に向かった。ちょうどALL4の試合が行われているからだ。

「…………ハルト。」

ふと思い、携帯を取り出し、画面を見る。テツに連れていかれてから、連絡は途絶えている。学校にも来ていなかった。一体何があったのか……心配にはなったが、今気にしている場合でないと割り切っている。……ハルトならきつとそう言うからだ。

長い通路を抜け、観客で賑やかなスタジアムの観客席に出た。

「ブラスターブレードでヴァンガードに攻撃。」

…ブラスターブレードだと……!?聞き覚えのあるカード名を聞いて中心へ視線を向ける。だが、そのファイターは反対側におり、よく顔が見えない。

俺は早足で観客席の通路を歩き、反対側へ向かう。

『ーー選手、クリティカルトリガーの効果を二枚乗せたブラスタースタールブレードで攻撃だあ!! さあ、トドメとなるかあ!?!』

『ん、相手の**選手はヴァンガードの攻撃で完全ガードを使い、手札は1枚です、パワー24000のブラスタースタールブレードの攻撃を防ぐのは難しいでしょう。』

そのままブラスタースタールブレードの斬撃は相手のユニットを襲う。

「ダ、ダメージチェック……、トリガーなし。」

勝負がつくと同時に俺は反対側に到着した、息を若干上げさせながらも視線を向ける。

「…ツ!!」

俺は驚愕した。

「な、なんだと……!?!」

『中堅戦……勝者、チームAL4ーー』

審判の腕が上がる。その審判の腕の先には……。

「何故だ……、なぜお前がそこにいる……!?!」

そこに立っていたのは、いつも学校で俺とファイトをしていた……、俺のかけがえの

ない親友……………。

『木崎ハルト!!』

「…………ハルトオツ!!」

——『チームA L4』としてそこにいたのは……ハルトだった。

第6話

「……だ。」

テツは扉を開けた。そこには高級そうなソファやお菓子などがあり、大窓を覗くとスタジアムの全体がよく見える。

「はえー、これってVIPルームだったりすんの？」

「そうだ。フーフアイターはこの大会の協賛としても活動してるからな。このくらいの待遇はしてもらえるんだ。次の試合は二時間後だ。それまではここでくつろぐなり自由にして構わない。」

話によると、スタジアムにあるでかいモニターの裏にあるらしい。全然気付かんかったわ。

「おっけー。」

俺が返事を返すとテツは頷き、部屋から出て行った。どうやら、レンに会いに行くらしい。

「……決勝らへんはもうレン達に任せたいんだけどな。早く立ち直ってくれよー。」
大窓からスタジアムを覗く。

「ここからだとはよく見えないな………観客席で見るか。」

俺が扉を開けて通路にでたところだった。

「ッ!!」

ちようど鉢合わせたのはライダースーツを見に纏い、長い金髪の女性……
「ウルトラレアのコーリンさんか……!」

そう、コーリンさんである。初めて生で見たけどやっぱり綺麗だな。目つきはテレビで見た時とは全く違って怖いけど。あれ、今から俺は殺されるのか？

「木崎……ハルト……!」

「あれ、なんで僕の名前知ってるんですか？初対面ですよね。」

めっちゃ睨みつけられて怖いんだけど。殺されるのかな？（くどい）

「ぐッ……!!？」

すると、いきなり胸ぐらを掴まれ、壁に叩きつけられる。痛い。……けど、女性特有のいい香りが少し急いでいたのかほんのり汗の香りと湿度がいい感じになって……、いいかんじになってる!!（語彙力）

「なんで貴方がAL4にいるの……!!？」

「……別になんでもいいだろ。」

「よくないわよ!!スイコから聞いたわ!あんた、雀ヶ森レンに勝ったのよね、しかもPS Yクオリアを使わずに!!權と思考が似てるのも知ってるわ、そんな貴方が……、なんでフーフアイターに……!なんで雀ヶ森レンのところにいるのよ……!!！」

コーリンの声が震えていた。あれ、初対面だよな?何この展開……。

「……レンを倒してしまった影響はそう小さくはなかつたってことだよ。今俺はそのツケを払ってるんだ。」

「……權から聞いた限り、『ごつち側』だと思ってたんだけど、違ったみたいね、がつかりだわ。」

「俺はトシキじゃないんだ。別にPSYクオリアを悪く思ったことなんてないし、否定もしないさ。フーフアイターも同じだよ、俺からすればただの強いヴァンガードファイターの集まりであって、それ以上でもそれ以下でもない。」

そもそも俺はヴァンガードエンジョイ勢なんだから、そこまで深刻に考えることなんかないんすよね。レンみたいにただひたすら勝利に飢えてるわけでもないし。俺はいたって普通のヴァンガードをこよなく愛する一般ぴーぽーの一人なのだっ☆（↑は？）

「俺がAL4にいる理由なんて、さつき言った『ツケを払う』つてのと、いい経験になるからってことくらいだよ。……ね？大したことないでしょ？（威圧）」

コーリンさんは呆気にとられた表情をする。そんなに可笑しかったかなあ……？

「……ふふつ、なによそれ。PSYクオリアを持つててそんな『普通の思考』を持つてる時点はある意味で貴方、普通じゃないわよ。」

「ええ……（困惑）」

すみません、俺普通のこと言ってるはずなのに変な人認定されちゃったんですけど。

「ふふ、ごめんなさい。あなたのことを貶したりしたこと謝るわ。貴方は貴方で考えがあつたのね。」

「いいよいいよ、俺なんかどうせ一般人と同じ思考をもつ変人なんだからさ。」

「貴方って案外面白い人なのね、気に入ったわ。」

コーリンさんは微笑みながらポケットからメモ帳にペンで何かを書き始める。

「これあげるわ。」

そして、その切れ端を俺に渡してきた。ん？これって…。

「私のメールアドレスと番号よ。登録しときなさい。たまに連絡してあげるから。」

え、急にアイドルさんからメアドと番号もらえたんですけど……（困惑）

今度は俺が呆気にとられた表情をしていると気づけばコーリンさんはその場から立ち去っていた。

『〜♪』

「ん？」

その直後、俺の携帯が鳴った。

『よろしくね☆ by コーリン』

コーリンさんからのメールだった。それを見た俺は冷静に指先を携帯に走らせる。

「よし、これで送信っと。」

俺は送信ボタンを押す。

『なんで教えてもない俺のメールアドレスを貴方が知ってるんですか。』

「……トシキが勝手に教えたのかな……？」

「おっす。」

俺は声をかける。

「……ハルト。」

壁に寄りかかるようにしていた、トシキに声をかけた。

「Q4はどうだった？ちようど他の人と喋ってたから見れてないんだけども。」
「…そんなことはどうでもいい。」

いや、どうでもよくないだろ。

「俺が聞きたいのはなんでお前がALL4にいるのかだ。」

トシキの目つきがより鋭くなる。

「…今日まだレンと青髪ちゃんの姿見てないだろ？」

「……。」

「病欠らしいのよ。」

「……まさか。」

「その通り、テツに場繋ぎのために頼まれたんだよ。」

「はあ……。」

トシキは呆れたように頭を掻いた。

「…だったら、連絡の一つはよこせ。」

「ごめんって、完全に忘れてたんすよ。俺も驚いてたからさ。」

「……ということは決勝でQ4と当たるときもテツとお前の二人でやるのか？」

やつぱり、そこ聞くよね。うーん………なんというか………。

「それまでに何とかレンと青髪ちゃんを間に合わせるよ。流石にぽつと出で決勝に出るわけにはいかんわ。所詮場繋ぎだし。」

「……それでもお前はテツから頼まれてるんだろ、認められてるってことなら出てもいいと思うが。」

「……んー、いや、それでもいいや。出るならちゃんと地区大会から上がって来たいしな。強い奴らと準決まで戦えるだけでもいい経験になるさ。」

「……フツ、そうか。」

トシキが少し笑みをこぼす。

「なにわろてんねん。」

「……相変わらず変なやつだと思ってるな。」

「それ言われたの本日2回目なだけだ。」

そんなに変かなあ……俺。

「アシュラカイザーでファントムブラスタードラゴンを攻撃!!」

これで5回目の攻撃になる、ノヴァグラップラーの特徴を生かした模範のような攻撃だ。

「ブラスタージャベリンでガード、そして、ブラスタードークのインターセプト。」

『守り切ったアツ!!木崎ハルト選手、***選手の5回にも渡る猛攻を見事凌ぎ切りましたッ!!』

「スタンドアンドドロ。」

「クロスライド。漆黒の破壊者 ブラスタードーク The・Disaster」

「……ペルソナブラスト。5体退却でブラスタードークのパワー+20000、クリ

ティカル＋1、完ガ禁止ね。」

二回戦、先鋒として戦っている俺は一回戦はロイヤルパラディンだったので、今度はシヤドウパラディンで戦っている。自分のダメージは5、相手は4だ。ここでクロスライドで一気にたたみ掛けようとしている。

『むー……、ハルト、なんで憑依^{ライド}してくれないのー？』

んなもん、あんなことしてたら気が狂いそうになるからに決まってるんだろ。

『ええー、たのしーじゃーん。』

お前がおかしいだけだよ。てか、PSYクオリア切れないの？クロスライドしたときだけ勝手に発動するのもイヤなんだけど。

『だーめ、ただでさえハルトは使ってくれないんだから、こうでもしないと、わたしのこと忘れられそうじゃん。』

別に………忘れたことなんてないけど。

『カードとしてじゃくて、一人の人間としてのわたしのことだよ。そのためのPSYクオリア^{ここのちか}なんだからさー。』

俺を見つめる紅い瞳はどこか虚ろだった。

……わかってるさ、ほら、さっさと決めるぞ。

『……はーい。』

「ブラスタースターダークでヴァンガードに攻撃！」

ブラスタースターダークの無慈悲な一閃が決まり、相手のダメージは6になった。

「先鋒戦勝者、チームAL4、木崎 ハルト!!!」

審判の腕が上がる。それを確認した俺はベンチに下がった。

「見事だ、ハルト。」

テツは満足そうな表情を浮かべる。

「……まあ、期待されてる以上、負けるわけにもいかないしな。あとは頼んだよ。」

「ああ、任せておけ。」

テツは堂々と表へ足を運ぶ。……まあ、負けることはないだろうな。

まあ、結果は当然だが、テツは勝利し準決勝に進出に無事進むことができた。だが、俺としてはもうそろそろお役御免しておきたい。理由は簡単、次の相手と同じフーフアイターの『ブリリアントスターズ』になったからだ。なんでチームカエサルの方じゃないんや!!（届かぬ思い）絶対恨み買うことになるやんけ。

「はあ……。」

「……どうしたハルト。」

「聞いてくれよトシキィ……。明日の準決勝さ、フーフアイター同士で戦うことになるのよー、絶対恨まれてるやんけエ……。あー、まじつらたにえん（絶望）」

「……知るか。」

「辛辣すぎない!？」

トシキは興味なさげに視線を逸らした。

「ハルト。」

すると後ろから野太い声がした。

「おう、テツ。」

「そろそろフーファイター本部に戻るぞ。レン様がお前に話したいことがあるそうだ。」
「え……………」

もおおおお!!!絶対なんか言われるやんかあああッ!!!

「てか、俺に会わせて大丈夫なの?」

「今は、レン様の精神状態が安定してるからな、行くぞ。」

ホントに大丈夫かよ……（不安）

「……………てことだ、トシキ、また明日な。」

「…ああ、またな。」

俺はトシキと別れ、テツの後ろをついていった。

「……だ。」

俺はフーフアイター本部の最上階にあるとある部屋の前に連れてこられていた。

そして、そこには『レン様のおへや☆』と書かれた看板が……………、やべえ、もう入りたくなくなってきた。

「……………ごめん、帰っていい？」

「ダメに決まってるだろ。」

「……………デスヨネー」

テツはドアをノックする。

「レン様、木崎ハルトをお連れしました。」

「……………。」

ん？何て言ったんだ？全然聞こえん。

「ハルト、さあ入れ。」

「えっ、テツは？」

「ハルトだけに入ってきてほしいそうさ。私は執務に戻るとするよ。」

それだけ言ってテツは去って行ってしまった。

……………ええ、どうしよう……………。もうそのまますっぱかして家に帰ろうかな、でも確
実にバレそうだし……………、行くしかないかあ……………。

俺は腹を括ってドアノブを握り、押し開けた。

「し、失礼しまーす……。」

俺は恐る恐る部屋に入った。中はベッドと机のみとシンプルな構造になっており、そのベッドに腰掛けていたのが……

「久しぶりですね、木崎ハルト……。」

パジャマ姿で少し痩せたような気がするが不気味に微笑む、間違いなくフーフアイターの頂点、『雀ヶ森 レン』だった。

「ベッドに座ってください。」

「は、はい……。」

レンは俺にベッドに腰掛けるように指示した。

「し、失礼します……。」

俺は恐る恐るベッドに腰を下ろす。

「……遠いです。もっと私の近くに座ってください。」

「え。」

遠いと言われても、レンとの間隔は一人分くらいしか開いてないんですがそれは……。仕方ないと割り切った俺はレンの真隣まで距離を詰めて座った。

「……ふふっ、それでいいんです。」

「は、はあ……。」

レンはごく満悦のようだ。もう既にいろいろと意味がわからない。

「さて、木崎ハルト。私が貴方をここに呼んだのはちよつとした雑談をしたかったからです。」

「雑談……?」

だったら、なんで俺なの?ますます分からないんですけど……。

「貴方と私はこの前、戦いましたね。そのとき、私は初めて敗北を喫した。……屈辱でした、初めて会った見ず知らずのファイターにこの私が負けてしまったのですから。」

「このチカラの導きに従えば、必ず勝てると思っていた。でも、貴方はそれを超えてきたのです。」

「……まあ、対策してたしな。」

「今はありませんが、その時は初めての敗北という屈辱感と貴方に対する憎しみで頭の中がいっぱいでした。……オマケに一時的とはいえ、トラウマも植え付けて行ったのですから。おかげさまでデツキを見ることすら出来なくなつてたんですよ?」

あ、トラウマの件はホントに申し訳なかつたです。

「そして現在、動けませんがまだ万全の状態とは言えません。これも全て貴方の所為です。」

「……………すみません。」

あのー、あまりにも発言がドストレートすぎて被ダメージがかすぎるんですけどー、もう少しオブラートに包んで欲しかったです。

「だから、貴方には私のいうことを聞いてもらいます。」

「え……………」

……………ごめん、嫌な予感しかせんわ。何させられんだろ、社会的な死を与えるのなことなら今すぐにでも逃げ出したいぞ？てかもう、雑談じゃないし、いや、最初っから雑談じゃなかったわ。

「……………木崎ハルト、貴方は私を倒した。そのおかげでPSYクオリアは完璧なチカラではないことがわかりました。しかも、初めて負けた所為か精神的ダメージも少なくともなかったです。未だに私はあの紅い瞳を忘れられてません。そして、初めてあんな屈辱的

な負け方をした、そうさせた貴方のことを心の底から憎んでいました。」

「……ほんとすみません。ほぼ全部俺のせいです。」

「でも……、私が倒れて次に目覚めた時に思い浮かんだのは何故か、木崎……、貴方のことでした。貴方のことを考えると憎たらしくて……憎たらしい……はずでした。」

「あんな屈辱的な負け方をして、恥をかかされて憎たらしいはずの貴方のことを考えると胸がキュツと締め付けられるような……、そんな感覚に陥ったんです。リハビリで色んなことをしていても常に脳裏には貴方のことが残ってました。デツキに触ったときは顕著でした。ブラスタードークのカードを見ると、貴方とファイトしたときのこと、トラウマになってるはずのことが夢のように蘇ってきます。そこにいる木崎の姿を見るだけで胸が苦しくて、でも心地よくて……切なくなりました。」

「……ん？なんか不穏な……。」

「もしかしたら、私は嬉しかったのかもしれない。今まで私に敵う相手はほとんどいなかった。私と同じ次元に立っていることが嬉しかったんだと思います。それがわかった瞬間、この気持ちの正体がわかりました。……ボクはハルトに惹かれてみたいです。だから……。」

すると、突然ベッドに押し倒された。

「貴方のことが好きになりました。ボクのものになってください。」

「イヤです（即答）」

「えっ」

「え？」

「……………」

「……………」

よし！（？）この話はもう終わりだな！

「…じゃあ、俺帰るんで。その、お疲れ様でした（？）」

俺がベッドから立ち上がろうとした瞬間からだった。

「なんでですか……。」

「……。」

「行かないでくださいよおお!!」

「うおっ!?!」

。レンに腰からしがみ付かれた俺はバランスを崩し、倒れた。

「いきなり何すんだよ!!」

「なんでボクの一世代の大告白を断るんですかー? こんなこともう一生やりませんよー?」

「告白をする相手を間違ってるぞ。同性じゃなくて、異性の子にしてあげなさい。ほら、青髪ちゃんとかいるでしょ?」

青髪ちゃんとかなら間違いなく喜んで受け入れてくれるから……ね? てか、急に雰囲気変わったなコイツ。

「ええー? つてことはハルトは女の子だったってことなんですかー?」

「んなわけねーだろ、男じゃ。」

「だったら、異性相手だからボクの告白は成立するってことですねー。」

「そんなわけ……、ん? 異性相手……?」

「はい、異性相手ですよー?」

異性相手って俺に対して言ってる訳だから……。

「…ッ!!?」

俺はレンの発言の違和感にようやく気付いた。こいつまさか……!

「ひとつ確認していいか?」

「……………? はい、いいですよ?」

「お前は男だよな?」

「いえ! ボクは女ですよ? えつとー、……こそせき? でしたっけ、それでは『男』ってことになってますけど。」

「えつ……戸籍上は男なのに、オマエは女なの?」

「はい、ほら身体もこの通りですよ。」

「……………ばッ……………!?!?」

そう言ってレンは満面の笑みで躊躇なくパジャマを捲り上げる。引き締まった細い腰にくびれ、そして、パジャマという引っかけかりが取れて、ぽよんっと現れる物体を

「…か……ッ!!」

一瞬視認してすぐに視線を逸らした。

「……………どうしましたハルト?」

「……………」

やばかった。ヤツがパジャマをまくった瞬間、首が固定されたように動かなかったもんね。あとコンマー秒遅かったら完全に見えてたわ、何がとは言わんけど(手遅れ)、なるほどね、だから少しダボつとしたパジャマを着てたのか。てかコイツまじで女やんか……………。

「……………ハルト?」

「わかったのでとりあえず戻してください。」

「んっふふっ、これでわかってもらえましたね？つまり、ハルトはボクのものになるってことですねっ！」

「ところでさ（完全無視）、なんでレンは男として生きてるの？」

うん、俺は何も聞いてない。何も聞いてないぞ（復唱）

「ボクが雀ヶ森グループの一人娘だからです。家を継ぐのは男と決まってるので男ってことにされました。まあ、女って時点で家系では弱い扱いなんであまり良く思われてないんですけどね。」

「そうか……。」

レンが力に執着してた理由がわかったような気がした。レン……、お前は自分を守るために強くなろうとしてたんだな……。

「なるほど、ところでこのことを知ってるヤツってどのくらいいるんだ？」

「貴方だけです。」

「え？」

「ボクの秘密を知ってるのはハルトだけですよ。」

……まじか、テツにも言っけなかつたのかよ。つまり、青髪ちゃんは男と思って懐いてるってことになるのか……。複雑な心情やなあ……。

まあ……

それはそれとして

「なるほどな、事情はわかった。でも、お前はひとつ忘れていることがあるぞ。」
「……………」

俺は立ち上がり、レンの方を向く。そして……

「お前は女でも戸籍上は男なんだから異性ではないということだ!!」

「あつ……………」

はい、完全論破。帰ります。

俺が改めて清々しい気持ちでドアノブに手をかけた瞬間だった。

「やだあああああああ!!!いがないではるどおおおおお!!!」
「なんだ…………つて痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!」

「痛い!!!」

赤い瞳を潤わせ、顔は涙でぐちゃぐちゃになったレンが俺の肩に手をかけ、抱きしめるように行かせまいと必死に抵抗する。てか、爪がめり込んで痛いです。あと、胸も当たって辛いです。

「異性ならボクと付き合ってくれて言っでくれだじやないですがああああ!!!」
「言っでねーよ!!!」

こういう告白は異性にしてあげなさいと諭しはしたが、異性なら付き合うなんて一言も言っでないからな!?

「だったらなんで付き合っでくれないんですかああああ!!!?」

「そんなの、会っで間もなく、つい数分前まで男だと思っでたヤツといきなり付き合えっで言われても付き合えるかああああ!!!俺は帰るツ!!帰るぞオオツ!!!」

「い やあああああああああああ い が ない で え え え は る
どおおおおおおおおおお!!!」

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い爪がめり込んでるって!!」

レンも負けじと俺を掴む力を強めてくる。強まるとそれに比例して身体の密着度も上昇し、俺の理性をマツハで蝕んでくる。……………これじゃラチがあかねえな……………。

「よ、よし、だったらこの条件でどうだ!？」

「ぐずつ、じよ、条件……………ですか……………?」

「決勝であたるであろうチームQ4に勝って優勝することだ。それが出来たら考えてやるよ。」

……………トシキがいるし、なんとかなるじやろ（根拠のない安心感）

「ぐずつ……………、わかりました。……………ボク、頑張ります……………!」

「よし!それじゃあ俺は帰るぞ!頑張らなくてもいいけど頑張れ!!」

ちゃんとレンが納得してくれたと確信した俺は今度こそドアノブに手をかけ、逃げるようにしてフーフアイター本部を後にした。

「ただいまー。」

「おじやましませす♪」

とあるマンションの一室、俺はここで一人暮らしをしている。父と母は二人とも海外の方に仕事で行ってるので帰ってくることは年に数回程度しかない。

ちなみにトシキの家はこの隣だったりする。たまに押しかけてメシを食わせてもらったりしてるのだ。あ、トシキも一人暮らしね。家族の事情はNGの方向でオネシャス。

「あー…………、腹減ったな。なんか冷蔵庫にあったっけか。」

メシは家を出る前に炊飯器の予約ボタンをポチツとしてたから炊いてあるんだが、おれが気づくまでどうかわからない。いや、別にTKGでもいいんだけどさ。

「ん…………。」

「なーんにもないですねー。」

「せやなあ…………。」

冷蔵庫を漁ると、半額のシールの貼られたもやしと2割引シールの貼られた豚肉があった。

「……………とりあえず適当に炒めて焼肉のタレぶっかけて食うか……………」

焼肉のタレをかけとけばとりあえず美味しいということを学んだ俺は早速それを活かすべく行動に移る。

俺はさらに戸棚から業務用の焼肉のタレを取り出し、火をつけたら小柄なフライパンに豚肉をぶち込んだ。

「ボクの方もお願いしますねー♪」

「はいはいわかって……………ッ!!?」

ハツとなつて声の聞こえる方に視線を向けると、そこにいたのは満面の笑みでテーブルに座つて楽しみに俺のメシを待っている『雀ヶ森レン』だった。

「んー、十分トラウマを植え付けておいたはずだったんだけどなー、弱かつたかなあ。」

「早くそいつからハルトを引き？がさないといけないねー♪」

「ハルトに私たち以外のメスは必要ないからねー。」

彼女は朗らかな笑みを浮かべてはいたが、その表情は引きつっていた。

「ハルトがもし、地球^{あつち}で……………、他のメスどもと……………、…………ちやったら……………」

「消さないと……………」。

『消さなきや』

彼女の中で何か壊れたような気がした。

第7話

木崎ハルトさん

權くんの友達で、僕に『アルフレッドアーリー』をくれた人だ。そして、そのアルフレッドアーリーは僕とブラスタブレードを再び繋ぎ合わせてくれた。

一度しか会ったことがないから、木崎さんのことはよく知らないけど、とても優しい人だということはわかった。僕を……、チカラに溺れていた僕を止めるためにその場にはいなかったけど陰ながら權くんに力を貸してくれて、『ふたりで』僕に思い出させてくれた。

そんなあの人も僕と同じく『ロイヤルパラディン』を使っている。權くん聞いたところ、レンさんと同じ、『シヤドウパラディン』も使いこなして欲しい。權くんも負けたいことがあるらしく、すごく強いファイターだというのは直ぐにわかった。

でも、そんなあの人は

チームAL4の一員として戦っていた。

「……………なんで、木崎さん……………」

ヴァンガードチャンピオンシップ全国大会本戦の準決勝、第1試合にチームAL4が戦うことになっていた。僕らQ4は二戦目にチームカエサルとぶつかることになっている、今更すべきことは無いのでAL4の試合を見ようと観戦席に足を運んだのだ。最初見たときはびびくりした、何かの間違いかと目を何回も擦って目を凝らすがあるのはあの『木崎さん』だった。

でも、もつと驚かされたことがあった。

「……俺のターン、スタンドアンドドロ。」

木崎さんがおもむろに手札から取り出した一枚のカード、それは……。

「クロスライド!!」

辺りが光に包まれ飲み込まれる。思わず目を瞑ってしまった僕が次に目を開いた時……。

「……ッ!!これは……!!」

そこは地球とよく似た惑星、『クレイ』だった。僕は岩山の高い場所にいた。そして、このイメージ、この能力に覚えがあった。

「……PSYクオリア……！」

そう、PSYクオリアだ。僕は以前このチカラに溺れ、周りが見えなくなつて、周りに迷惑をかけて……、自分が自分で無くなるような……、そんな強くて恐ろしいチカラだ。そのチカラを木崎さんも持つていたなんて……。そのことにも驚いたが、もつと驚かされたことがあった。

「ブラスタブレード……!？」

『……その聖なる剣をもつて、全ての者に希望の光をツ!!』

僕がよく知る分身は全てを包み込むようなそんな眩しく優しい光を放つ大剣を持ち、立ち上がる。

準決勝、俺はフーフアイター傘下である『ブリリアントスターズ』と戦っていた。正直に言うと死ぬほど戦いたくなかった。だってもうあのイケメン君から溢れ出る殺気がヤバいもん。あまりの気迫に動揺してガードをガバったりとか、もう負けそうですも

んボク。

「あー、なんであの時焦ってガードしちやっただろ、ガードするタイミング絶対そこじゃないのになー。これが全国大会か……！（関係ない）」

トシキはとにかく、先導くんたちはこんな緊張の中、堂々とファイトしていたのかと思うと、正直尊敬の意しか覚ええない。

おかげさまで左列はガラ空き、右列の方はバロミデスとマロンで埋まっている。そして、手札は二枚。ほんとのほんとに大ピンチだ。

だが、俺には一応切り札がある。これでなんとかリアガードを展開出来れば勝利はほぼ確定だろう。

俺は手札のカードを掲げる。そして、

「クロスライド!!」

『フツ……ようやく出番のようだな……任せろハルト!!』

そんな頼れる相棒カノジョは勇ましく、そして堂々とその光の剣を携え、立ち上がる。

『極光の救世主メサイア ブラスターブレード!!』

「な、なんだそのユニットは……!?見たことがないぞ!!」

相手のイケメン君も目を見開き、驚きを隠せない。それもそのはず、俺も今日入れたばかりのカードだ。急遽デツキ調整する羽目になって苦労したモンだ。

『……………んっ♡……………ふあっ…♡ハルトと……………ひとつになってる……………♡こんな感覚なんだ……………、病みつきになりそう……………♡』

このブラスターブレードにライドしても、ダークの時と同じように勝手にPSYクオリアが発動してしまうらしい。今、ブラスターブレードに憑依して一つになっているような感覚だ……………喘ぐのやめろや。

「……………登場時スキル、山札からグレード2以上のユニットを一体コールできる。俺は……………」

俺は山札を手にとって、あるカードを探す。この戦況において、一番リアガードの展開に優れたユニット……………、『彼女』しかない。

「ハイドックブリーダーアカネをスベリオルコール!!」

『任せてっ!!』

俺はアカネをブラスターブレードの隣にコールした。

「そして、コールされたユニットにパワー+10000だ。」

ブラスターブレードのスキルでパワーが10000プラスされ、アカネのパワーは19000になった。このパワーもすごいが俺が求めていたのは彼女のスキルだ。

『ハルトっ!』

彼女^{アカネ}は振り向き俺を見る。

「……ああ、わかってる。頼むよアカネ。」

『任せてっ!!』

そして、彼女は力強くムチを振るう。

『先導者ハルトの命の下に、来なさいッ！ばーくがるッ!!』

『ガウツ!!』

次の瞬間、何処からともなく颯爽とばーくがるッが現れた。……………ん？ばーくがる？

……………まあいいや、そして、これではーくがるッのスキルで山札からふううがるッが呼べる。

「ばーくがるッをレスト、山札からふううがるッをスペリオルコール！」

『任せなさい!!』

……………これで盤面が全て埋まった。この状態になることにより、ブラスタースターブレードのあるスキル発動条件が満たされた。

「ブラスタースターブレードのペルソナブラスト。」

俺は手札にあつたブラスタースターブレードをドロップゾーンに置く。

『メサイアニック・シャイニングノヴァ!!』

彼女は辺りを埋め尽くすような白く、凄まじい光を放つ。

「このスキルにより、ブラスタースターブレードのパワー+10000、クリティカル+1を得る。更に前列のリアガードにもパワー+5000、そしてあるスキルを与える。」

「スキルだと……?」

そう、この救世主^{メサイア}となつたブラスタースターブレード、ただ周りを強くするだけでは収まらない。真骨頂はその付与するスキルにあるのだ。

「そうだ。そのスキルとは、ヴァンガードのアタックによるドライブチェックで出たト

リガー効果をその付与されたスキルを持つユニット全てが共有するんだ。」

「な……………ツ!!？」

つまり、ドライブチェックでクリティカルトリガー出た時は付与されたスキルを持つユニット、今回の場合だと、アカネとバロミデスのふたりにもトリガー効果であるクリティカル＋1とパワー＋5000が付与されるということだ。これこそが彼女の救世主としてのチカラ、『メサイアニック・シャイニングノヴァ』ってわけだ。

「……………行くぞ、ブラスタブレードでヴァンガードに攻撃!!」

ばーくがるはレストしているため、ブーストは無いがそれでもパワーは23000、クリティカル2……………十分だ。相手はダメージが4のため、ガードは必須となる。

「め、冥界催眠術師でガード!!」

やっぱり、完全ガードを切ってきたか。でも、ツインドライブがある。

「ツインドライブチェック！一枚目……。」

一枚目は『まあるがる』、ドロートリガーだ。

「効果はヴァンガードに、そして一枚ドロ。……セカンドチェック！」

2枚目は『ふろうがる』、スタンドリガーだ。

「この効果も全てヴァンガードに!!そして、スキルにより、アカネとバロミデスもトリガーの効果を得る。よって2体とも合計でパワー+10000だ！」

……やべ、守りきられるかもしれない。クリティカルトリガーを引かなかったおかげで相手は一度だけノーガードでいけちゃうんだよな。

「ふろうがるのブースト、アカネ!!」

アカネはブレードのスキルとトリガー効果で34000まで上がっている。そして、

ブースト込みで合計パワーは39000だ。……まあ、クリティカルは1だからノーガードだろうけどね。

「……ノーガードで。ダメージチェック………ゲット！ヒールトリガー！」

ほら、ノーガードじゃんって………は、ヒールだと??

「………バロミデス。」

「ノーガードで。」

………マジか。こんだけぶちこんでもダメージ4止まりですか……。うん、完全に想定外だったね。てか、1ダメージも与えられてないやん。

「ふふふ……、これだけの攻撃をもってしても1ダメージも与えられないなんて、お前も相当天に見放されてるなア!!」

イケメン君がイケメンじゃなくなるくらいにイキっている。……殺したい。

『……ハルト。』

ブラスタースターブレードの声が聞こえる。

「ああ、わかってるさ、まだ終わりじゃない。」

そう、今のブラスタースターブレードにはもう一つスキルがある。

「おい、元イケメン。何勘違いしてるんだ？」

「あ？」

「バトルはまだ終わってないぞ？」

「は？何言ってるんだ、お前のユニットの攻撃は全て終わってるじゃないか。」

「……………ブラスターブレードにはもう一つスキルがある。コストとして、手札2枚を捨てて、リアガード5体をソウルに置くことで発動できるスキルだ。」

「……………まさか……………！」

「そうだ、ブラスターブレードはスタンドする……………！」

ブラスターブレード
オレはその剣を強く握り、再び立ち上がる。

『……………行こうハルト。』

「ああ!!」

「……………す、すごい……………このためだったんだ……………、半ば強引にリアガードを埋めてたのは……………！」

そう、ブラスタープレード単体でも充分火力があつて、アカネのスキルでばーくがるをコール、わざわざレストまでして、ふううがるを呼び、リアガードを全て埋めていた。一見無意味にしか見えない行動……………でもそれは全てこのスタンドスキルの為、相手が耐えた時のことを考慮に入れた上で、打っておいた布石だったんだ。

「ブラスタープレードでヴァンガードに攻撃!!」

トリガー効果も乗って、パワーは33000まで上がっている。そして、クリティカルも2だ。

「……………くっ、ガードだ！」

相手は『ダイナマイトジャグラー』を二枚切り出してきた。これで相手のパワーは36000。でも、トリガーが一枚でも出ればいける!!

「ツインドライブ……、1枚目。」

1枚目はプラスターブレード、トリガーじゃない。

「2枚目。」

木崎さんは二枚目を引く。

「……………クリティカルトリガーだ。」

『希望の運び手エポナ』

クリティカルトリガーだ!! 38000対36000でプラスターブレードの方がパワーが上回る。つまり、攻撃は通る!!

「効果は全てヴァンガードで。」

「……………ダ、ダメージチェック。」

イケメン君は震える手でデッキをめくる。

「ツ!!」

「おっ?」

すげーな、あのイケメン君、ヒールトリガー引きやがったよ。何気に二連続ヒールつてすごいよな。

「まあ、無効ヒールなんですけどね。はい、続きどうぞ?」

そう、俺のダメージは5で相手のダメージは4、で、5ダメージのチェックとなるとヒールトリガーは無効になる。ダメージは同じかそれ以上じゃないとヒールトリガーは使えないからね。因みに無効ヒール引く人見るのが一番楽しいです（クス）

「くそっ……………、二枚目!!」

しかし、そう奇跡は続かず二枚目のカードは『ナイトメアドール ありす』で、トリガーではなかった。これで6ダメージとなる。てか、もう4枚全部消えてるよね、奇跡じゃなくて必然だったわ。

「先鋒戦勝者！チームA L 4、木崎ハルト!!」

審判の右腕が上がった。

「……なんでぼーくがるがデツキに入ってたんだ？」

ファイトが終わってある程度落ち着いた時に思ったこと、それが本来FVに使うユニット、ぼーくがるがデツキに入っていたことだ。

アカネのスキルで呼ぶ際に最初は適当にぼーんがるあたりで済ませて、スタンドスキ

ルは捨てるつもりだったんすよ。そしたらさ、なんかデツキにぼーくがる居て思わず二度見しちゃったもんな。

ぼーくがるが間違えて入っちゃってるってことはつまり、何か一枚ユニットが抜けてるってことになる。

「あつ、ぼーんがるさんが3枚しか入ってないんで間違いないですね。」

まさかこんな凡ミスが勝利を導くとはホントヴァンガードは面白いな！（適当）

「ふー……。」

俺は席に腰を下ろす。そして、備え付けのウォータークーラーの水を紙コップに汲み、少し口に含ませる。

「流石ですね、ハルト。」

すると、俺の横にぼすつと寄り添うように座る影。

「……………レン、復活したのにも関わらず、もう用済みの俺を戦場こんなじょうに駆り出したお前を俺は絶対許さないからな。」

昨日勝手に俺の家まで着いてきて、夕飯までご馳走させる挙句、泊まっていくとかいう暴挙に出た男オシナ、雀ヶ森レンだ。

「用済みなんかじゃないですよ？これから貴方は私の大事なヒトですから。」

「別に俺がいなくても勝てるだろ、それに決勝になれば青髪ちゃんも帰ってくるんだから。」

そう、療養の為に実家に帰省していた青髪ちゃんがマツハでこちらに向かっているの（い）とらしい。

「むー……、ボクがいるのにハルトは他の女の子の話を出すんですかー？」

頬を膨らませて明らかに不機嫌そうな表情になる。

「男じゃん（書面上は）」

「ボクはハルトの前ではれっきとした女ですから。」

「てかさ（無視）、お前決勝出るんだろ？」

「当然です。ハルトとの賭けもありますしね。それにボクは負けません。權であろうと誰であろうと勝ってみせます。そして、貴方を手に入れてみせます。」

目的がアレだが、その目は真つすぐ俺を見ており、強い覚悟を感じた。いや、そんなことで覚悟するのもおかしいんだけども。

取り敢えずトシキを死ぬ気で応援しますかね……。

「すげー……！」

圧巻だった。何手も先読みして考えられた戦略、カウンターブラストの使い方、ユニットの配置、全てにおいて僕を超越している。PSYクオリアに頼らずしてこの強さ。流石は權さんと互角に渡り合っていたファイターなだけあると実感させられた。僕はたしかに強くなった、強さをはき違えて溺れたこともあった。それらを含めて強くなった……でも、まだまだ足りない。順調に勝ち上がっていけば必ずあの人と当たることになるだろう。今のままでは到底あの人には及ばない、完膚なきまでに叩きのめされてしまうだろう。

「……………強くならなきゃ……………！」

目指すべき目標がすぐ近くにいたことを実感しつつ、優勝するためには超えなければならぬ大きく高い壁。自然と握る拳に力がこもっていた。

「……………ん、……………ッ!？」

目がさめると、真つ暗な場所にいた。何も見えないし、なぜか動くこともできない。縛られているというよりは金縛りにあっているような、体を動かそうとするがビクともしない。

「(ハ)は……………」

『……………えへへ、目が覚めたみたいだねハルト。』

すると、突然背後から声が聞こえる。この声には聞き覚えがあった。

「……………プラスター……………ダークか……………？」

すると、突然部屋が明るくなり、眩しすぎて耐えられなくなった俺は思わず目を瞑る。

「えへへ……………あたり〜♡」

「んむっ!？」

すると突然口に柔らかい感触がした、それだけでは収まらず、彼女の舌が俺の口の中

に入り込み蹂躪していく。体を動かさずされるがままにされていた俺は苦しくもどこか気持ちよく意識が朦朧としてきたのがわかった。お互いに苦しくなってやっとその唇が離れた。離れた際に銀の糸がたりりと引いた。

「ぶはあ……っ、えへへ、私の初キスだよ、気持ちよかったよね……♡」

彼女は頬を赤めらせて、息を荒くしていた。俺も苦しくてさつきから胸の高鳴りが抑えられていない。

「……はあ、はあ、なんでいきなりこんなことをしたんだ……？」

「そんなの……あの雌豚にハルトを盗られないようにするために決まってるじゃん。」

彼女は無表情で虚ろな目をしながら言った。

「……私の何が足りなかったの……？性格？それとも身体？それとも私が『ユニット』だ

から？……あの女がハルトに近づいたときき、とつても胸が痛かったんだよ？ハルトは私たちを……、私を愛してくれてるはずなのに、気づけば他の女に手を出してるんだもん。」

「いや、少なくとも俺は何もしてないんだが？向こうから勝手にきてるんだし。」

「関係ないよ、私たちはハルトや地球の奴らからすれば所詮カードの中のキャラクターでしか無いんだよ。P S Yクオリアが無ければこうやって触れ合うことも出来ない。」

彼女は震えながら普段とは考えられない弱々しく俺に抱きついてくる。

「……違うぞブラスターダーク。俺はお前らのことをそんな風に思ったことなんて一度もないさ。」

これはまぎれもない本心だった。P S Yクオリアのおかげで彼女たちとも繋がりを持つことができた。アプローチは激しいが、こんな俺を好意的に思ってくれたことは正直嬉しかったんだ。

「ハルト……私たちのことも想っててくれたんだ、本当に嬉しいよ……♡でもね、私はど

うしても不安が消えないの、もし、地球の他の女のことをハルトが好きになったら……？ヴァンガードをやめちゃったら？私たちのことを構ってくれなくなったら？私たちのことを忘れちゃったら？ハルトが他の女に会うたびに頭によぎるんだよ……！」

ダークは震えながら俺の胸に顔を埋める。その力は強く、そして、怯えてるようにも見えた。

「……………だからね、私は決めたんだ。」

「他の女をハルトには絶対近づけさせない。」

「そうすれば、私たちのことを……………、私のことを覚えててくれる。」

「私のことを想ってくれる。」

「私のことを愛してくれる。」

「えへへ……、最初からこうしてればよかったんだね……♡」

彼女の暗く無機質な紅い瞳は俺だけを射抜いていた。そして、不気味に、三日月のよ
うに口元を歪め、笑みを浮かべる。

「……まずは手始めにあの雌豚雀ヶ森レンを

消去デリートしてやる。

わざわざ、トラウマまで植え付けてハルトから離そうとしたのにまだハルトにつきま
とつてるんだよ？ だったらさ、もう消去データするしかないよ。そのためこのチカラなんだ
から……！」

すると、突然彼女の手のひらの上に赤い輪のようなものが現れた。その輪は不気味に
ゆらゆらと回転している。

彼女の狂ったような高笑いとともに俺の意識は遠のいていった。

そして、俺のデツキにも顕著に変化が現れていた。

『ブラスタードーク デリクター
根絶者』

シャドウパラディンのデツキの一枚、相棒であるブラスタードークは禍々しい姿へと変貌を遂げていたのだ。

*
*
*

だが、悪夢はまだ終わらない。

「ハ……………ア……………ツ!!?」

思わず目が覚めた。なにかとんでもないものを見てしまったような気がした。

「な、なんだ……………夢ですか……………」

時計を見ると、『1:14』と表示されていた。

「まだ、夜中ですね……………」

再び眠気がボクを襲ってきた。

「グツ……………!!?」

突然頭が割れるような痛みが襲ってきた。

いたい。

頭がおかしくなってしまうそうさ。痛みで身体が思うように動かずベットから落ちてしまう。

いたい。

だんだんといしきがもうろうとしてきた。

「は……………る……………つ……………」。

「……………えへへ、やーつと消えてくれたね♪」

『わたし』はやつと手に入ったカラダを確かめるように動かす。うん、問題ないみたいだね。

「……………呪縛ロツクで済ませてあげたことを感謝してほしいね。本来なら消してるところだけど、ハルトもそれを嫌がってたからね。」

ハルトの嫌がることは私もしないよ。当たり前だよね？

「さて、やつと地球に來られたんだ、まずは……………」

「ハルトに会いに行こうかな♪」

第8話

「でさ、ブレードのやつが拗ねちゃってしばらく口聞いてくれなくなっちゃったんだよなー。」

「あはは、まあ、ブレードは割と嫉妬深いからね。ハルトが迂闊だったんだと思うよ。」
「ええ……、俺が悪いのかよ……。」

「んー、全面的にハルトが悪いっ!!っっていう気は無いけどさ、きっとブレードは褒めて欲しかったんじゃないかな。」

「……………そもそもさ、アイツ料理がめちゃくちゃ下手くそだったことに俺は驚いてるんだよ。」

見た目は凄くうまそうなスープなのに一口食べた瞬間に口が弾け飛びそうになったもんな。あ、物理的にね？

「あれでも上手くなった方だよ。最初なんか食べた人は最低5日は寝込んでたんだから

ね。」

「……………まじか。」

「うん。ボクも……………1週間くらい意識不明だったし……………」

そんな虚ろな目で空を見上げているのは、レモン色の短い髪に青い被り物をし、水色の瞳に赤縁眼鏡、服装は近未来感の溢れた青い装束のような服を着ている。かなり中性的な容姿をしているが、れっきとした女の子である。

そんな彼女の名前は『小さな賢者 マロン』

名前の通り、賢者で、博識である。

マロンは割と温厚な性格してるからさ、結構俺も話しやすいんだよね。ブレードやダークに話したらちよつとしたことでハイライトオフで迫ってくるんだもん。俺目線

結構助かってる部分もあるんだよな、困ったことの相談にも乗ってくれるし、ポジシヨンのに言えばかなり親友に近いって感じかな。

「ん、そろそろお昼になるね。ハルト、ボクの家でお昼食べていかない？ご馳走するよ、つて言っても料理がそこまで得意なわけでもないけど。……………ダメかな？」

かわいい（直球）

その上目遣いが既に俺から断るつていう選択肢を消しにかかっているんだよな。よつて答えは一つ。

「じゃあ、お邪魔しようかな。」

「よしつ、それじゃボクの家に行こうか。」

「お邪魔しまーす。」

「はーい、どうぞ。」

そして、マロンの家にやってきた。家はあまり広くは無いが、それは多分本棚が沢山あるから狭く感じるだけなんだろう。生活するスペースをかなり削っているようにも見えた。流石賢者って呼ばれてるだけあって本も沢山読んでいることが一目でわかる。

「〜♪」

鼻歌交じりにおたまを握っているのももちろんマロンだ。エプロンを付けてる姿は正直可愛いと思う。

「おまたせハルト、カレー作ってみたんだ。味の感想聞かせてね♪」

「おっ、すごく美味しそうだな。いただきまーす。」

俺はスプーンでルーをご飯とうまく絡めてすくい、口の中へと運んだ。

「ん……、美味しい……！」

単刀直入に言うのと、すごく、もう今までに食べたことないくらいに美味しかった。カレーがここまで美味しく感じたのは初めてだ。というか、俺好みにここまで仕上げたマロンがすごいんだな。

「ホント？ えへへ、口にあつたみたいでよかつたよ。まだまだ沢山あるからどんどん食べてね♪」

マロンもホツとしたような安心した表情を浮かべ、笑顔を浮かべた。

俺はしばらくの間、どんどん進むスプーンを止めることが出来なかった。

ボクはハルトのことならなんでも知っている。

身長、体重、I.Q.、体脂肪率、好きな食べ物、好きな飲み物、ペットにしたい生き物、好きな女性のタイプ、苦手な性格など、例を挙げればキリがないほどにだ。

今回作ったこのカレーもハルト『だけ』の好みに仕上げた。カレーのルーの分量や種類、人参の刻み方、じゃがいもの大きさ、煮込む時間の長さ、肉の固さなど寸分狂わず正確に作り上げている。

「んっ、うめえ………！」

ハルトが間違いなくおいしいと言ってくれるのはわかってたとはいえ、やっぱり好きな人に美味しいと笑顔を見せてくれるのは嬉しいものだ。ボクの頬が熱くなり、緩んでいるのがわかる。

ここで、ボク特製の媚薬と睡眠薬を合わせたものをカレーに投与して、ハルトを眠らせた後、じっくりと既成事実を作ってしまったても良かったのだが、そんなことはしなかった、というよりできなかつた。そんな無理やりハルトを襲って、孕んだとしてもハルトは喜んでくれるはずがない。もしかしたら嫌われるかもしれない。それだけは絶対にあつてはならないのだ。

………というのは、一番最後以外は建前で、目的はもう一つある。そもそも、ブレードたちみたいな強引な方法でハルトを墮とすのは合理的じゃないからボクとしてはあまり好みじゃないってことだ。

だからボクはハルトにとって別の意味で特別なヒトになることにしたんだ。友人、親友のような位置に立つことでハルトのブレードたちには見せない表情、ボクだけを頼ってくれるように仕向けている。ボクを持つ知識なんてハルトのためだけにあるような

ものだ。

ここらへんに住む人たちはみんなそうだ。ハルトのデッキのユニットたち、また、初めてハルトにあつて感化されたユニットたちが住んでいる。よつて、この区域は全てハルトを中心にして回っているんだ。みんなハルトのことが大好きだし、ハルトさえいればクレイなんてどうでもいいとまで思っている末期の奴らもいるくらいだ。……ま、その末期にボクやブレードも入っちゃうんだけどね。

ブレードの兄はアルフレッドに次ぐロイヤルパラディンの指揮者であり、常に前線に立ち、仲間を鼓舞し、引っぱっている。妹であるハルトのブラスターブレードも勿論才能は兄譲りで高い。現場の指揮能力も譲らず劣らざつてところだね。……まあ、物事への関心が薄いし、ハルトのことばかり考えてるからその点を含むならかなり兄に劣っているのかもしれないね。

まあ、彼女のことは置いておくとしてボクだつてそうだ。ボクなんて突発したスキルもないただのグレード1。ブラスターブレードのように周りを鼓舞することもできない。それでもハルトはボクを必要としてくれた。それだけで嬉しかったんだ。

ハルトが望むならどんなことでもするよ。でも、ハルトはボクたちのことを大事にしてくれてるから無茶なことをさせようとしたりは絶対にしない。みんなが積極的にアプローチを仕掛けても上手く有耶無耶にして誤魔化しながら躲してる。ハルトも、平等に、みんなのものであろうとしてくれてるんだ。でも、ここ最近は周りからの激しすぎるアプローチに疲れてるみたいだ。そのことを知った時にボクのすべきことがわかったんだ。

ハルトの親しい位置に立って、癒してあげること。

これは恋愛感情を捨てないといけないかなりハイリスクな行動だ。親身になってあげないといけない。アプローチも制限されてしまうだろう。ハルトのことが大好きな周りの連中に譲らないといけない。それを思った時、迷ってしまった。

でも、ハルトの顔を思い返すと、胸がキュンキュンして苦しくなっちゃって……、ハルトへの愛が抑えきれなくなってしまうそうになるんだ。

だから……………

「んむっ……………、んっ……………／／／」

夜、ボクは静かに眠るハルトを襲うんだ。今だつてそう、ハルトの口に舌を潜り込ませてデーパーキスの快感に浸っている。でも、ハルトは起きない。理由は簡単、眠りを深くする魔法をかけているんだ。これでよほどの物理的な痛みを加えない限り起きないはず。

「……………はあ……………」

苦しくなって顔を離す。すると、ボクとハルトの口と口で銀の糸がたらりと垂れた。

「ふふっ、ハルト……♡」

幸せだった、ただただ幸せだった。ハルトが好き。そんな人として繋がっている。それはもう、麻薬的で病みつきになるようなそんな幸福感に襲われる。

万が一、ハルトが起きてしまったら………？

「~~~~ツ♡」

ボクの背中にゾクゾクと何か走った。無意識にボクは服の裾に手をかけ持ち上げていく。そして、その服を地面に捨て、上半身には何も隠すものがない、生まれたままの姿となった。ハルトの目が開くだけでボクの醜態が晒されてしまう、そう思うだけで興奮し、息が荒くなっていくのがわかった。

「は………♡はあ………♡………♡ん♡」

ボクはハルトに覆い被さるように密着し、その胸の膨らみを直接の押し付けするように体制をとった。直接触れているのでソレはより明確に、マシユマロをつぶすように柔らかく形を変えていることがわかった。そして、その感覚はより敏感になっていた。

「んっ♡……………はると、ボクね、ハルトに満足してもらいたくて頑張ったんだ……………。胸だって大きくっ……………なっただよ……………？もう今のブラじや収まりきれないんだ……………っ♡」

もつとハルトに意識して欲しくて、魅力的になりたくて……………、ずっとひとりでシてたんだよね……………♡

「でもっ……………、ボクに勇気がなかったから……………っ、ごめんね……………♡」

ゾクゾクと、そんな背徳感すら味わいながら、こうして深いキスを交わす。

「……………んっ……………!?!んん~~~~~っ♡」

カラダが熱くなり、心拍数は上がっていく。そして、突然身体がビクンビクンと痙攣するように跳ね上がり頭の中が真っ白になった。ハルトが下手したら起きてしまうようなそんなギリギリな行為をしているという背徳感だけで絶頂してしまったみたい。

「ボクの全てはハルトのモノなんだ……………♡だから絶対に見捨てないでね……………♡ 見捨てられちゃったらボク……………生きていけないよ……………」

そんな淡い一言をこぼし、眠りについた。

苦しい。

なんで苦しいかって？

そりゃあ、顔面いっぱいに柔らかいものが押し付けられてるからに決まってるんだろ!!
やっとマロンが眠りについてくれたから安心して眠れるってのに……、危うく窒息

死しそうになるとはなあ。………たしかにちよつと大きくなつてるよね、うん、着痩せするタイプだったっぼいわ。

ん？まるで今までの会話を聞いてたかのような素ぶりだなんて？……あー、まあ実際全部聞いてたしな。

俺が眠る前らへんくらいに眠りの魔法、正確には眠りを深くする魔法をかけられたんだけど、俺には効いてなかったってだけだよ。

何で効いてないのかというとな、まずはブラスター二人組から魔法耐性を強くする薬を飲まされてその後にかロンから周りの魔力を薄める効果のある薬を注射されたり、マーハちゃんからは魔素を吸収する人形をプレゼントされたり、ソウルセイバードラゴンの加護を受けてたり色々仕込まれてるから、魔法や薬物耐性に関しては多分トップクラスだと思うわ。

まあ、おかげでマロンの本音も聞けたし、これからどうしていくべきか考えるいい機

会になったんじゃないかなあ……。マロンもマロンで俺の為に努力してしてくれてたのも正直嬉しかったしな、カレーなんか多分相当研究して作ってると思うし、ほんと感服させられたね。

「……………」

俺は起き上がる。まず、すべきことはひとつだ。

「とりあえず服を着せよう。」

うん、ほぼ全裸で寝かせるのはダメだからね。とりあえず床に脱ぎ捨てられてたマロンのパジャマを拾ってなんとか着せようとしてみる。

「……………よいしょつと……………」

なんとか袖までは通すことができた。しかし、直ぐに壁にぶち当たってしまった。そう、『ボタン』だ。彼女が言っていた通りなら確実に大きくなっているのだ。そこで前から使っているであろうこのパジャマ、当然サイズが合わなくなってきたのも見えてくる。下から止めていつているのだが、上から二番目以降がどうにもこうにも、ボタンが届かないのだ。既に窮屈そうで左右からその双丘に力がかかっている、谷間が出来上がってしまった。もう辛抱たまらんですわ（理性崩壊）

「……………んっ……………♡」

彼女の声が漏れ、身体がピクツと反応した。それが既にエロくて、もう、なんか、こっちの理性が吹き飛びそうだ。とりあえずボタンに関して諦めて、なんとか布団を被せて冷えないようにしてあげること収束した。

「……………と……………！」

「……………ると……………、お……………て……………！」

「んあ……………う？だれ……………だ……………だ……………。」

目を開けてゾツとした。目の前に広がったのは紅い瞳、一瞬フリーホラーゲームとかでよくあるいきなり画面いっぱいに映る怖い画像あるつしよ？あんな感じ。まあ、そんな紅い目と紅い髪が特徴な奴って言ったたらレンくらいしかおらんわな。てか、なんで俺

の家に上がり込んでるんだよ。

「うおあっ!？」

「あっ、やっと起きたねハルトっ♪」

飛び起きたかと思ったら、突然抱きしめられてしまった。

「…………えへへ、やっとこっちでハルトに会えた♡」

「…………レン?」

「…………これがホンモノのハルトの感触…………、ふふっ」

「…………レンさん?」

「…………あっ、……………そっか、私が『雀ヶ森レン』だったんだっけ。」

何かボソボソ言ってるが、顔を埋めているためさっぱり聞こえなかった。

「……ハッ！ハルトに会えたのが嬉しくてついつい喜びに浸ってしまいました……！」

レンは正気に戻ったかのように顔を上げた。

「なんで俺の家にいるんだよ。鍵閉めてあっただろ？」

「えへへ、会いたくて仕方なかったんでピッキングして玄関開けてきちやった☆」

「なーにやってだこいつ。」

ピッキングしてまで開けるって、もう鍵さん仕事してないやんけ。オートロック式のマンションに引越そうかな……。

「明日決勝……？だからさ、今日暇だったんだよね、もう今日はずっとハルトと一緒に

にいるから。」

「ええ……………帰れよ……………(困惑)」

「ひどいよー。」

うん、レンあたりになるともう構うのもめんどくさいから帰ってほしいわ。よし、テツに連絡しよう。

「むう……………、せつかく来てあげたんだから構ってよー。」

再び俺に抱きついて上目遣いで俺を見るレン。

「……………う？」

俺はレンの目を見て違和感を覚えた。何か違うような感じがしたからだ。赤は赤でももつと深く、もつと濃い赤。レンならそんな目をしていたはず、いや、別に俺が目フエチとかそういうやつじゃないからね？あくまで違和感の話だからね？

「……………レン、だよな？」

「んー？私は『雀ヶ森レン』だよ？」

……………私？

「……………お前は誰だ？」

俺は改めて問う。

「……………だからー、私は雀ヶ森レンだって……………」

「レンの一人称は『僕』のはずだが？」

「……………。」

いや、私の時もあるけど、あれは公の場だけのはずだ。本来の一人称は私じゃなく『僕』だったはず、それに、レンは基本、敬語……いや、丁寧語で喋るはずだ、マイペースな感じは似てるが、明らかにマイペースの方向が違う。

それに、俺はこの『感じ』にどこか覚えがあつた。

「……………んー、やっぱり気づいちやうかあ……。悔しいけどよく『雀ヶ森レン』のこと見てるね、ハルト。」

諦めたように苦笑いを浮かべるレンの姿をした何か。

「お前は一体誰なんだ？」

「ハルトならわかるでしょ？」

にやにやと俺を試すように言い放つ。候補は一応いる、というよりそいつしか思い浮かばない。でも、あまりにも現実離れしすぎて信用していいのかすら悩まされる。

「ふふつ、信じられないって顔してるね。」

「えっ、マジでオマエなの？」

「んー？オマエって誰かなあ、名前でいってごらん？」

「……」

「……ブラスターダーク？」

「びんぽーん」

……マジか。

「なんでお前が地球ここにいるんだよ。しかも、レンの格好してるし。」

「ふふっ、この身体は雀ヶ森レンのモノなんだけどね、ちよーっと、本人の方をロック呪縛して、身体の支配権をいただいたって感じ。」

「そうか、だったら本人に早く返してあげなさい。」

「えー、やだよー。こーやって、ハルトを直に触れて感じる事ができるんだもん。少なくとも完全に返納することは無いよ。」

「おい。」

「んー、まあ、全国大会みたいな面倒ごとは本人に任せるけどね。ハルトのそばにいるときは大体『私』になるかな。」

すると、レンのポケットから音楽が流れる。………着信か。

「もー、ハルトと楽しく話してたのに……、テツからだー、はいっ、ハルトよろしくっ
♪」

「ちよっ!?!」

レンがめんどくさく思ったのか俺に携帯を投げてきた。

「……………もしもし?」

『……………レンs……………、ハルトか。ということ、レン様はハルトのところにいるのか。』

「ああ、なんか俺の家にいたんだが?」

『そうか、なら、すぐに本部に帰還するよう言っておいてくれ。』

「わかった、一応理由を聞いておこうか?」

『權が押しかけて来たんだ。おそらくレン様が目的だろう。』

……………トシキのやつ、いつの間にそんなことしてたんだ。連絡の一つよこせてのに。

「おっけ、レンに言っておくよ。」

『ああ、よろしく頼む。』

そう言つてテツは通話を切つた。

「おい、レン。」

「なあに？ハルト。」

ソファーで寝転がっていたレンがこつちを向く。

「お前じゃない、本人の方に急用ができたみたいだぞ？すぐ本部に戻れつてさ。」

「ええー……、もーしようがないなー。」

「ぐっ…!？」

そう言つた後、突然レンの中身が抜けたかのように俺に倒れこんできた。この状況を見て俺は悟つた。

「えっ……………、俺が運ぶの……………？（困惑）」

「……………とりあえずタクシー呼ぶか。」

突っ立ってても仕方がないので、取り敢えず携帯でタクシーを呼ぶことにした。

第9話

「……………をスタンド!!そしてアタック!!」

「ツ……………!アビスヒーラーとカロンでガード!」

……………まずいな。俺の手札をフルで使ってもガード値がキツイ。ヤツのパワーは23000、トリガーが出たら、一発KOだ。

「ツインドライブ……………、1枚目、トリガー無し。2枚目……………」

トシキがめくったカードは……………

『槍の化身 ター』

クリティカルトリガーだ。

「効果は全てヴァンガードに!!」

「……………おい、起きろレン……………!!」

俺は移動しているタクシーの中でレンを起こそうとしていた。てか、そもそも
プラスチック
アイツが勝手にレンの身体を乗っ取って俺の家まで押しかけてきたのが全ての原因な
んだよな。しかも、最後は面倒ごと全部俺に押し付けて消えちやうし。

「……………ん……………ここは……………うっはると……………?」

「やっと起きたかレン。」

「ふふっ……………、ハルトの匂い……………」

「……………嗅ぐなや。」

目が覚めたかと思っただらいきなり顔を埋めてきやがった。

「トシキがお前さんに用があるってさ。だからちようどフーフアイター本部に帰るところなんだよ。」

「……あれ、なんでボクはタクシーに乗ってるんです？ボクの部屋で寝てたはずなのに……。」

「……覚えてないのか？お前、俺の家まで押しかけてきやがったんだぞ？」

「うーん……、全然記憶にないですね。いつの間にハルトの家に行ってたんでしょう……。夢遊病ですかね……？」

参ったな……、ガチで記憶残らないパターンじゃないですか……。そんなしよつちゆう記憶飛んでたらいつか本人の方が壊れてしまいそうだな、なんとかしないと……。

「はい、到着しましたよ。お代は……3240円です。」

……たつか。フーフアイター本部までタクシーで来たがまさかここまでお金がかかるとは……！念のため聞いとくか。

「……レン。」

「手ぶらですよっ。」

「…クソが。」

俺は舌打ちをしつつ、運転手さんに5000円札を渡した。あとでテツにフーフアイターの予算の方から運賃くらい下りないか聞いてみるか。

ビルの中に入って、廊下を進んでいると、周りには皆血眼になってファイトをしている。流石、ヴァンガードの頂点を目指すフーフアイターといったところか、良くも悪くも熱意は本物のようだ。

そして、エレベーターでひたすらビルの上の方へ上っていく。最上階である15階、エレベーターをでて直ぐ左側に小さなファイトスペースがあった。そして、そこに見慣れた顔もあった。

「……レン。」

「……權、やはり来ていましたか。」

何がやはりだよ、さつきまで俺の家に押しかけてたクセに。

「俺が何故ここに来たのかわかるか……？」

「ええ、私を屈服させに来たのでしょうか？あの先導アイチにもしてみせたように……ま、今はハルトあなたに屈服させられてすっかり虜にされちゃってますけどね。ふふっ。」

……コツチミンナ。

「ハルト、お前もなんでここにいるんだ？」

「あー……、こいつさつきまで俺の家にいたんだよ。」

「な………っ!？」

「だからさ、わざわざタクシー呼んだ送って来たんだよ。」

俺は奥にいるテツの方を向く。

「……テツ。」

「なんだ。」

「タクシー代って予算から下りないのか？結構かかったんだが。」

テツはごほんと軽く咳をして言った。

「お前はフーフファイターに所属しているファイターでも無ければ、関係があるわけでもない、そんなヤツに何故わざわざ予算から捻出して運賃を渡さなければならぬのだ？」

「○ね（即答）」

ど畜生だったわフーフファイター。○ねばいいのに。

「……可哀想に。君が可笑しな考えを吹き込んだせいで、彼はチカラを使わないという選択をしてしまった。」

別に間違いではないと思うけどね。人それぞれだし。

「愚かですね、これほどのチカラを否定してしまった。」

そう言い、レンは一瞬チカラを発現させる。

「權……、君はわかっていないのですよ。このチカラの素晴らしさをね。」

「……あのチカラはお前を変えてしまった。チカラに頼りすぎるとはヴァンガード本来の楽しさを忘れさせ、ただ相手を倒すことにしか目が向かなくなる。」

それはわかる。このチカラを使ったファイトは本当のカードファイトなんかじゃない。そういう考えはトシキと同じだ。

「……それに、お前は木崎ハルトに負けたらしいな。思い知ったんじゃないのか？あのチカラは完璧じゃないってことに。」

「ええ、私はたしかにハルトとのファイトに敗れました。でも、これはきつと運命だったんです。……ふっ。」

そうやって俺の前に来たレンは俺の服の裾をぎゅつと握る。

「…………おい。」

「さっぱりお前の言ってることが理解できないが、俺は決めた。あの3人で競い合っていたあの頃に戻ると…………！」

「ええ…………、覚えていますよ？楽しかったですよね…………。」

レンは懐かしむように微笑む。

「でも、それを裏切ったのは、權…………、お前だ。」

「…………ツ。」

しかし、レンはまるでこの世の悪を憎むかのような顔でトシキを睨みつけた。

「…………ファイトだ、レン。」

トシキはデツキを取り出す。

「……………そのファイト、私たちも見届けさせてもらうわ。」

突然後ろから声があったので振り向くと、そこにはよくテレビで見かけるあの3人がいた。

「……………ウルトラレア……………」

「久しぶりね、ハルト。」

「……………ども。」

そこには勿論コーリンさんもいた。とりあえず軽く返事だけしておく。

「なんで連絡してくれないのよ……、心配したんだから……。」

「いや、なんの心配すか……、コーリンさん忙しそうでしたし、連絡するのも迷惑かなって……。」

「迷惑ならそもそも連絡先教えたりしないわよ……、いい？これから毎日電話かメールをよこさない。しないならこつちの方からするから。」

「ええ……。」

【悲報】毎日連絡取れる（義務）相手が出来ました。

すると、更に後ろから自動ドアの開く音が聞こえた。

「……来たようね。」

そこにいたのは準決勝で光定ケンジを下した青髪の少年、『先導 アイチ』だった。

「あつ、あの僕……、コーリンさんに呼ばれて……って、權くん!?それに、レンさん……!!?」

驚いてる様子の先導クン、多分何も聞かされてねえなこれは。

「……………どういうことだ？」

トシキが神妙な顔で尋ねる。

「彼にはこのファイトを見守る資格があるわ。」

「資格……………、つて木崎さんも来てたんですね！」

「よつす、まあ、俺はレンを送ってきたただけだけだな。」

……………もう俺必要なくね？俺つてチカラに関係してそうで今回の騒動に関してはほとんど関係が無いんだよね。

「ふふつ、これでこのチカラに関係する人が全員揃いましたね。」

「アイチ、よく見ているんだ。俺たちのファイトを……………！」

「權くん……………。」

うん、雰囲気もそれっぽくなってきたしもう俺は必要ないな。

「じゃあ、俺はもう用が済んだんで帰りますね。」

別に見届けなくても今のトシキなら勝てると思うしいいよね？夕飯何作ろうかなと
考えながらここを立ち去ろうとした瞬間だった。

「……ハルト、どこに行くんです？」

「……ッ!？」

背後から突然聞こえてきたひどく底冷えした声。恐る恐る振り向くとそこには虚ろな目をしたレンがいた。てか、いつの間に俺の後ろにいたんだよ。

「なんで、帰っちゃうんですか？これからファイトするっていうのに。ハルトはボクの
ファイト見てくれないんですか？」

「……見てやりたいのは山々だが俺はこれからスーパーに寄ったりなんやらで夕飯の支
度があつてだな……。」

あ、その前にATMで金下ろさねえと……。

「むう……、いやです、帰しません。来てください。」

「……って、おい……！」

俺はレンに無理やり引っ張られてトシキのいるファイトテーブルまで連れてこられてしまった。

「これ付けてください。」

そしてレンが不意に差し出してきたのはVFグローブだった。

「いや、俺帰りゃ「付けろ。」………はい。」

「トシキガンバレー」

結局、トシキとレンのファイトを一番近い場所で見ると羽目になってしまった。なんとその場所はファイトテーブルの側っていうね!!しかも鎖付きの手ぶくろだから逃げられねえし!!

「むう……、ボクの応援はしてくれないんですか?」

「ああ、權の勝利を心の底から願ってるからな。」

「ひどいですよーハルトー」

「うるせー、俺はとつとと帰って夕飯の支度がしたかったんだよオ!」

「今日の夕飯はなんですかハルト?」

「あー、今日はだなあ……、ってなんで聞くんだよ!!」

「ハルトのご飯美味しいですしー、これ終わったら泊まりに行こうかなーって。」

「来るな。てかいからとつととはじめろや。」

もうトシキが完全に空気と化してるんだよな、雰囲気ぶち壊してごめん、ごめんよ……。

「はい、始めますよー、權。」

「……ああ。」

……気を取り直してお互いにFVを裏向きに置き、構える。

「スタンドアップ、ザ!!ヴァンガード!!」

PSYクオリアに対抗する方法、それは常に最悪の状態を想定し、対処することだという。ヴァンガードにおいてそれは当たり前のことだが、PSYクオリア相手だと最悪の想定なんて毎回と言っていいほど起こる。だから、少しの狂いも許されない。そのた

めには手札の使い方、これが勝負の明暗を分けると言っても過言ではない。

俺はハルトにそれを教えられ、どう凌ぐか、それを考え日々デッキを組み直し、最善手を探し続けた。

「ドラゴニックオーバーロードでプラスターダークにアタック!!」

「…ノーガードです。」

「チェックザドライブトリガー。……ドロートリガー。パワーはバーニングホーンへ、そしてドロ。2枚目、ドロートリガー、さらにドロ。これもパワーはバーニングホーン。」

それが、対PSYクオリア用トリガー構成。
クリティカル ☆ トリガーを減らし、ドロ引トリガーを増やすというものだ。

『さて、ここでトシキくんに質問です。デツキ構築において、対PSYクオリアとなると、トリガー構成も見直さなければなりません。そこで、引と☆、醒トリガーの割合はどうなるでしょうか?』

『……長引けば長引くほど不利になるから、☆と醒^{スタンド}トリガーを増やして速攻で相手を仕留めるのがいんじゃないか?』

『そうだねえ………とりあえず不正解と言っておこうか。それはPSYクオリアを持つてる人がやることだ。悔しいが、力無き者はある時までには守りに徹する方がいいんすよ。』

『ある時……?』

『ああ、そこを畳み掛ければ勝率はかなり上がるはずだぜ。』

「……ファントムブラスタードラゴンでオーバードにアタック!」

ファントムブラスタースキルでパワーは21000、それに加えてアポカリプスパッドのブーストも込みで31000まで上がっている。しかもクリティカル2だ。最低でもガード値は25000要求される。俺のダメージ2で十分受けられるとはい

え、ここで☆トリガーを引かれるとダメージ5、下手したら6で勝負を決められかねない。……………ここは……！

「ワイバーンガードバリイで完全ガード!!」

「ふふっ、いいでしょう。チエックザドライブトリガー。1枚目……………、2枚目、ゲット、クリティカルトリガー。効果は全てフアタリテートへ。そのフアタリテートでアタックー!」

「ノーガード!…………ダメージチエック。」

「ターンエンドです。」

ダメージは4対3で押されているが、ここまでは順調に展開を運んでいる。…………後は。

「……終わりなき探求の果て、たどり着きし最終進化。荒ぶる魂を昇華させ、今こそ真の姿を現せ!! クロスライド!!」

「ドラゴニック・オーバーロード・ジ・エンド!!」

「……ターンエンドだ。」

で、トシキの秘密兵器にして最強のユニットであるジ・エンドが登場したわけだが、特に効果を発動するわけでもなく終わった。

そ·れ·で·い·い·。

両サイドのリアを潰し、攻撃を通したのはヴァンガードの攻撃のみ。先攻はどうしても先手で強いユニットを呼べるから一気にたたみかけてしまいたくなるが、PSYクオリア使い相手にそれは良い手とはいえない。何故なら、このファイトの結末がそいつには見えている。たしかに予想外な手を打つことで相手の勝利のイメージを覆すことも可能だ。だが、先攻の場合はそれは悪手だ。その予想外の手も踏まえた上での勝利が見えていることがあるのだ。ヴァンガードにおいて、蹴りがつく場面はお互いにG3にラ

イドした次のターン、7ターン目以降の場合が多い。そこを狙って集中攻撃をしかけるのだが、レンの手札をまだ削りきれていなかった。あの枚数だとあのスキルを使ったとしても、守りきられてしまうだろう。それにトシキがスキルを使わなかった理由は他にもある。それはレンがジ・エンドの攻撃をガードせずに受けたからだ。レンのダメージは3、一発クリティカルが出れば一気に5ダメージまで持っていかれ、更にレンにとつては未知のユニットのはずのジ・エンド、もしスキルで何かあることを考えるならば、ここをガードしてリアガードの攻撃を受けた方が得策なのだ。そこをあんな平然と受けられるとなると簡単にあることが予想できる。

『このドライブチェックでトシキは☆トリガーを引くことはない』と。

その予想が立ったことで、レンはジ・エンドの登場も視野に入っていた可能性もかなり高くなった。

——そして、迎える第8ターン。

来るぞ……、トシキ……！

「ファイナルターン……!!」

レンが不気味な笑みを浮かべる。その瞬間俺は察した。ここで決めに来ると。

「……混沌なる静寂に叫びし絶望。幻すら見られぬ闇より、暗き闇の力を我にツ!!
ク
ロスライド!!」

「フアントム・ブラスター・オーバーロード!!」

予想通りフアントムブラスタードラゴンの上のクロスライドで現れたのは完全なる進化系のユニットだった。俺はより一層集中力を高める。俺がハルトと特訓してきたのはレンに勝つため、このターンを乗り切る為、PSYクオリアのチカラを乗り越え、レンにテツと3人で楽しくフアイトをしていた、あの頃のレンに戻ってもらうためだ。だ

から……………

……………絶対、凌ぎ切ってみせる……………!!

「……………ソウルにフアントムブラスタードラゴンがあるので常にパワーは13000です。更に……………ブラスターダーク、フアントムブラスタードラゴン、アポカリプスバットをコール。」

「……………ッ……………」

レンは盤面をほぼ全て埋めてきた。レンの残り手札は一枚のみ。

「お、リアガードにブラスターが3体……………、ふふつ、壮観ですね。」

そう、ブラスターが前列にいる。そして、後列のアポカリプスバットはブーストしたとき、そのブーストしたユニットがブラスターのつくユニットならソウルブラスト1でパワーを+6000、実質10000ブーストしたことになるといふ厄介なユニット

だ。ブラスタードークとオーバーロードの後ろにいるため、スキルは当然発動できる。お陰で俺のガードの要求値が確実に上がってしまうのだ。

「…バトルです。アポカリプスのブースト、ブラスタードークでアタック!!」

パワーは19000、ここは……………。

「…ノーガードだ。ダメージチェック。」

引いたカードはネハーレン、トリガーではない。これでダメージ5、あとが無くなった。

「ファントムブラスタードークオーバーロードの攻撃、……………この瞬間スキル発動。」

そして、レンは手札の最後の一枚をこちらに向けた。

「……自らの影を落とし、更なるチカラを……………ペルソナブラスト。」

それはヴァンガードと同じカード、『フロントムブラスターオーバーロード』だった。それをドロップゾーンに置く。ハルトのブラスターダークも持っているスキルだ。

「パワー+10000、クリティカル+1を得る……！」

これでフロントムブラスターオーバーロードのパワーは合計33000となった。

「さあ、フロントムブラスターオーバーロード、ジ・エンドにトドメの一撃をツ!!」

「ファイナルターン!!」

「…………ツ！」

「行けツ!! プラスターダーク、オーバーロードに攻撃だ!!」

(くそっ……、ガードが足りない……ツ!!)

「くくく……ツ! やつとだ……! ついに私は、あの權を……ツ!! 權トシキを……ツ!!」

『完敗』

その2文字が脳裏をよぎった。俺はヤツに手も足も出なかったんだ。

「…………くつ、ダメージチェック……………」

俺は、何もできなかった。俺は6枚目のダメージチェック、これに賭けるしかなくなってしまうていたんだ。

「ぐっ…………ア…………!?」

「レン!!!」

——レンは頭を抑え、崩れ落ちた。

「おい…………ッ!!レン!!!」

「…………權。」

「大丈夫か、レン……………」

「ふふ…………、私…………、強くなったでしょう…?」

「…………ッ。」

レンは、弱々しく、だが、その目は全く死んでおらず、俺を捉えていた。…………俺はレンのその目に初めて恐怖を覚えたんだ。

「…………行くのか。」

「…………ああ。」

「……………俺はあいつのそばにいてやらないといけない。」

「……………そうか。」

俺はテツと短く言葉を交わし、そこを後にした。…………いや、逃げ出したんだ。あの未知の恐ろしいチカラ、あれに為す術もなかった俺は逃げ出すしかなかった。

……………だが、今の俺は違う。木崎ハルトと出会い、あいつからファイトの見方、デツキ構成、ファイトの展開、そして、『PSYクオリア』とは何か、そして、その対処の仕方。アイツのおかげでヴァンガードをさらに深く知ることができたし、強くなれた。

このアタック、この一撃を凌ぎ、勝利を掴むためにこれまで努力してきた。……………そのための手札は揃ってる。

「……………これが俺の、答えだツ!!」

「な……………ツ!!?」

レンは驚きの表情を隠せなかった。

『槍の化身 ター』

『ドラゴンモンク ゲンジョウ』

『ガトリングクロードラゴン』×2

『鎧の化身 バー』

シールド値は合計35000、これがなにを意味するのか。

「……………權、キサマ……………ツ!!」

「…お前のことだ。ここでガードの手を抜くとダブルトリガーで抜かれかねない。そのために、これを止めるために手札を揃えてきた。」

トシキに抜かりはなかった。守りきるための手札をきっちり用意してきたんだ。

……………これは。

「……………チェックザドライブトリガー。ドロートリガー、効果は全てファントムブラスタ―へ。……………2枚目、クリティカルトリガー。これもファントムブラスタ―へ。」

「……………トシキ。」

「ファントムブラスタ―でジ・エンドにアタック!!」

「ゴジョウでガード、そして、ネハーレンのインターセプト!!」

「……………つぐ……………ツ!!」

「……………お前の勝ちだよ、トシキ。」

「ファイナルターン!!」

第10話

「ファイナルターン!!」

レンの手札は3枚、それにそのうち二枚は何かわかってんだ、畳み掛けるならここしかないぞ……トシキ……!!

「バーニングホーンをコール! バーニングホーンでブラスターダークをアタック!」
「……………」

これでレンのインターセプトを封じた。あとはレンのさっきのドロートリガーで引いた一枚が何かによるが。

「……………ジ・エンドでファントムブラスターを攻撃。」

「……………ッ……………、リアガードを……………ッ!……………ノーガードだ。」

レンも悟った。

『スタンドがくる』と。

「チェックザドライブトリガー。……………ファーストチェック。」

『槍の化身 ター』

「ぐ……………ッ!」

「☆トリガーだ。効果は全てジ・エンドに。セカンドチェック……………!」

トシキは二枚目を見た。そして、ニヤリと不気味に笑う。あ、これ引いたな。

『ドラゴニック・オーバーロード・ジ・エンド』

「……レン、お前ならこの意味……わかるよな？」

「……ええ。」

トシキは引いたジ・エンドをドロップゾーンに置く。……そして。

「……ペルソナブラストだ。……ジ・エンドは再び立ち上がる!!」

これがジ・エンドのスキル。アタックヒット時にもう一枚のジ・エンドを捨てることでスタンドできるというものだ。

「……ッ、權……!!」

「エルモのブースト、ジ・エンドでファントムブラスターオーバーロードに攻撃だ!!」
『約束の火エルモ』はオーバーロードをブーストした時、更にパワーを+6000するスキルを持っている。これでジ・エンドはさっきのトリガー含め、パワーは28000となった。それにクリティカルは2。攻撃さえ通せば勝てる。

「……まだだ、私は……、ボクは權を……超えるんだッ!! ガード!!」

『グリムリーパー』

『アビス・フリーザー』

『プラスターダーク』

……残り一枚はプラスターダークだったか。これでファントムプラスターオーバーロードのパワーは33000。

「…トリガー1枚で抜けるな。引け、トシキ。」

トシキはこくりと頷いた。

「チエックザドライブトリガー、ファーストチエック。」

『ドラゴニック・オーバーロード』

……トリガーじゃない。

「……セカンドチェック!!」

『ドラゴンモンク ゲンジョウ』

「ゲット、ヒールトリガー。効果は全てジ・エンドへ!!」
「ぐう………ツ!!」

これでパワーは33000、ファントムブラスターオーバーロードに並んだ。これで

攻撃は通る。

ジ・エンドの激しい剣舞と銃撃が入り混じった攻撃がファントムブラスターオーバーロードを捉えた。オーバーロードは膝から崩れ落ちる。

ーーーーートシキが勝った。

「トシキ………！」

「……………ツ、……………ああ……………！」

トシキは遂に成し遂げた。成し遂げてしまった。P S Yクオリアの運命力をも凌駕するファイターになったのだ。

「……………だ。」

「まだだ……………!」

乱雑に置かれたトリガーゾーンのカードを見た。

『ファントムブラスタードラゴン』
『アビス・ヒーラー』

「ツ!?!」

ヒールトリガーだと……………!?

「まだだ……、ボクのPSYクオリアは終わってない……………! まだツ!! 勝利のビジョンは……………ツ!!」

まだ、レンは終わってなかった。満身創痕ながらも首の皮一枚でつなげてきた。

「……………なんて執念してやがる……………」

「くくく……………、またこれで、ボクにターンが回ってくる……………! このファイト、ボクの勝ちだ……………ツ!!」

そう、ここでヒールトリガーを引いてしまったおかげでフロントムブラスタースターオーバードロードのパワーは18000、リアガードのバーニングホーンの攻撃はブースト込みでも通らない。つまり、またレンのターンが回ってきてしまうのだ。まさか……………、引き当ててしまうなんて……………!

「終わりだ、レン。」

トシキが手札から見せた一枚のカード……、それは。

『ドラゴニック・オーバーロード・ジ・エンド』

「ひ……………っ！」

「ペルソナブラスト」

レンの顔が再び青ざめる。あいつの手札はもう無い、受けるしか無いんだ。

「うわあ……………」

今めっちゃ悪そうな顔になってたぞ、トシキ……。

「トシキ、おめでとう。正直負けたと思ったわ。」

「最悪の事態を想定して予め用意しておくことを教わったからな。といつても、トリガーチェックでジ・エンドが出たおかげなんだが。」

「にしても、最後のお前の顔すごく悪そうな顔になってたぞ。チームALL4の白髪クンにしたときみたいな顔してたじゃん。」

「……………うるさい。」

「まあ、いいか。……………とりあえずお前さんの勝利を祝つて……………、乾杯。」
「……………」

二人でジュースの入ったコップで乾杯をした。……………俺とトシキは俺の家でこうやって、打ち上げをしているわけだが。

「なんでボクも混ぜてくれないんですかー？ハルトー。」

何故かレンもついて来てるし。

「うるせー、俺はトシキが勝つ方に全振りしてたからお前の勝利なんか望んでなかったんだよオ!!」

「ひどいですよハルト。ボクの心はもうズタズタなんで慰めてくれませんかー？」

「そんな軽口聞けるなら大丈夫だろ。」

「ううう……………!!」

「…………レン。」

トシキが声をかける。

「なんですか、權。これ以上ボクをいじめるのはやめてください。」

「P S Yクオリアなんてチカラ、無くても強くなれる。俺はそれを今日証明したつもりだ。…………レンはどう感じた？」

「…………。」

「俺は昔の、3人で楽しくファイトしてたあの頃に戻りたい。あの頃のお前が一番輝いてたと俺は思うんだ。」

「…………過去には戻れない、そんなことくらい權もわかってるでしょう？」

「…………ツ…………！」

「それにP S Yクオリアが絶対的なチカラじゃない、そんなことはハルトに負けたときにわかりました。それでも………………！」

「…………。」

レンは顔を上げ、權を、まっすぐとその目を見て言った。

「それでも、ボクは權に追いつきたかった……!!だって、權は……、昔も今もボクの目標だったから……ツ!!」

「……レン。」

「なんでもよかった。あの時もそうだった。チームで一番弱かったのはボクだった。強くなってチームの役に立ちたかった。テツと權、二人の隣に立ちたかったんだ……!!そして、ずっと思ってた。一回だけでも、まぐれでもいいから權に勝ちたかったんだ……!」

震え声で弱々しくレンは言った。レンが力を欲した理由、元々はチームのために、チームの力になりたかったからなんだ。

「レン。」

「………なんですかハルト。」

「もう一度トシキとファイトするんだ。」

「……無理ですよ。あの力を以てしても勝てなかった。ましてやボクだけの力で勝つな

んて……。」

すると、トシキはデツキケースを出して言った。

「レン、俺とファイトだ。俺は知ってる。お前が表では明るく振舞ってても、裏では試行錯誤を繰り返して必死に強くなるうとしてたことを。きつと今でもそのはずだ。お前の、お前だけの力で俺を倒してみろ。」

「權……。」

「レン、お前のPSYクオリアを通したファイト、それもきつとお前にとってはいい経験になってるはずだ。チカラが無くてもお前は弱くなんてない。騙されたと思ってやってみな?」

PSYクオリアはユニットとの意思疎通だけでなく、ファイトの流れがよく見えるようになる。その感覚さえ思い出せば……。

「……………わかりました。權、ボクとファイトだ。」

「ああ。」

「フアントムブラスタースターオーバーロードでジ・エンドにアタック。」

「……………ノーガード。」

「ドライブチエック、1枚目……………、2枚目、クリティカルトリガー。パワーはブラスタースター、クリティカルはオーバーロード。」

「ダメージチエック。……………トリガーなし、お前の勝ちだ。」

「え……………」

レンは心底驚いたような表情でトシキのダメージゾーンを見た。そこには6枚、カードが並んでいる。

「……………か、勝て……………た……………？」

「ほら、PSYクオリアなんて無くても勝てたじゃん。」

レンはPSYクオリアを使っていた時の経験を決して無駄にしてなかった。それを自然と糧にして強くなっていたんだ。

「……………う、うう……………、勝でた……………ッ……………！糧に……………ッ、ううう……………！」
「……………泣くなよ。」

レンの目からは大粒の涙がぽろぽろとこぼれ落ちる。すると、突然抱きしめられ、俺の胸に顔を埋めていた。

「だって……………、うれしくて……………、うれじぐでえ……………ッ！」
「……………」

結局、レンはそのまま眠ってしまったので大変不本意だが、俺の家に泊めることに

なっていました。夜も遅いので今回はお開きということになった。

「トシキ、レンとファイトした時、本気で戦ったのか？」

「……………俺が手を抜いたことがあると思うか？」

あつ、やっぱり悔しかったんだ。

「そうか……………、俺も負けてられないな。」

「……………ああ。」

「じゃ、また明日なトシキ。」

「……………じゃあな。」

トシキは自宅に（と言ってもすぐ隣だけど）帰って行った。

「さて、俺も寝るかなあ。」

うーんと唸り声をあげながら背伸びをして、自分の部屋に戻ろうと振り向いた時

だった。

「ハルト。」

「……なんだレン、起きてたのか。」

「ふふつ、レン、ねえ……。」

……？

レンの反応が変だ……。

「……あー、そういうことか。」

「うんうん、そういうことー♪」

まあ、結論から言うとコイツは俺のブラスターダークだ。眼の色が普段のレンよりも紅いのだ。てか、目に光がない。

「いやあ、ハルトのオトモダチの『カイ』って人すごいんだね。P S Yクオリアの運命力

ですらねじ伏せちゃうんだからね。」

「ああそうだな（適當）で、何の用だよ、俺はもう寝たいんだけど。」

「ええ、ハルトといちやいちゃしたいから出てきたのにく。」

「うるせ、夢でも出てくるクセにリアルでも出てくるんじゃないよ。」

すると突然抱きつかれて、押し倒されてしまう。

「なんで？私、ハルトがいないと何もできないのに。ハルトが寝ている間だけなんて我慢できないよ。」

「……………」

「すんすん……………、イヤだなー。レンの匂いが染み付いてる。でも……………、私の身体だし。それに……………他の女の匂いも少しするね……………」

「他の女って……………、別に何もしてないぞ？」

「へえ……………、まあいいや。なんならいつそのことわたしレンの匂いたくさんつけちゃうね♪」

「なにを……………んむッ!？」

「んむ……………ッ、ちゅ……………ん……………♡」

押し倒されたかと思っただけなら突然唇を奪われた。突然のキスに驚きを隠せなかった。それと同時にとてつもない快感が襲う。

「ふはあ……………♡」

「……………はあ、はあ……………。なんで、いきなり……………」

「えへへ……………、やっぱり気持ちいいよねハルト♡」

「ふーん、アイツ、こんなことして胸押さえてるんだ。なんでそんなことするのかなあ……………」

ダークはおもむろに自分の服の中に手を突っ込んだ。すると、服の中からすると白い包帯が落ちてくる。

「ふうー、苦しかった〜。」

そう言うと、彼女は正面からその胸を押しつけるように抱きついてきた。

「……………おい。」

「うーん、やっぱりこんな小さい胸じゃハルトは喜んでくれないよね。」

いや、そんなことないんだが。誰であれ、そんなことされたらこっちも気が気じゃなくなるんだけど。

「私の身体ならもつと、ハルトを喜ばせられるのにね。…………ハルトのために育ててきた身体だから。」

「そんなこと言っても俺の答えは変わらないぞ。」

「……………えー。」

ダークは俺の胸に顔を埋めてきた。

「私ねー、ハルトとこうやって直に触れられて、過ごせてすごい幸せなんだ……………♡ もうこの身体もらっちゃおうかな……………」

「……………だとしてもな。お前は惑星クレイの住人で、この世界ではカードのキャラクターでしかない。」

「……そう言うと思ったよ、ハルトなら。そこらへんのメリハリは恐ろしいくらいハツキリさせてしまうからね貴方は。」

「ま……………」

「そんなことで止める諦めるつもり気もないけどね」

彼女はあの時のように狂気を宿した瞳を不気味に輝かせながら嗤っていた。

「……………明日、私が出るから。」

「なに……………?」

ーあいつの言ったあの言葉、その時の俺は理解出来なかった。

『びんぼーん』

そして翌朝、結局あまり眠れなかった俺はコーヒを飲みながら時間になるまでテレビを眺めていると突然インターホンが鳴った。

「はーい。」

玄関に行き扉を開けた。

「どちらさま……………、ああ……………」

「レン様の迎えに来たわ、入れなさい。」

そこにいたのは青い髪に青を基調としたライダーズワンプを着こなし、腰には可愛らしいピンク色のリボン、チームAL4の青髪ちゃんこと『鳴海 アサカ』さんだ。

「あー……、気苦労かけてすみません。どうぞどうぞ。」

「お邪魔するわね。」

とりあえず中に入れて、椅子に腰を掛けさせた。

「あ、コーヒーです。よかつたらどうぞ。」

「ありがとう、いただきわ。」

さつき豆を挽いて作ったコーヒーだから、そこらのインスタントよりかは美味しい自

信はあるんだけどどうか……。…。

「ぶほっ……!?!」

「ど、どうしました鳴海さん!?!」

突然鳴海さんがコーヒーを噴き出したからめっちゃびつくりした。

「けほっ……、これってブラック……?」

「あ、すみません。シロップとミルク持ってきますね。」

「……………悪いわね。」

「いえいえ。」

鳴海さん大人っぽいのにブラック飲めないんだ。……………かわいいな。

そんなことを思いながら棚にあるガムシロップとコーヒーフレッシュを取りに行つた。

「ねえ、木崎。」

「はい。てか、俺の名前知ってるんすね。多分初対面だと思うんですけど。」

昨日、レンとトシキのファイトの時は奥の方でファイトを観てたのはわかったけど話したことはなかったな。

「一体貴方はレン様の何なの？」

一瞬俺の思考が停止した。神妙な顔で鳴海さんはそう聞いてきたのだ。

「貴方が普通のファイターじゃないのはわかってる。レン様を下し、挙げ句の果てには少しの間とはいえ、レン様を寝たきりの状態に、精神的に不安定な状態にさせてしまった。正直あなたのことを私は憎んでいたわ。」

「……すみません。」

「謝ることないわ。今は貴方のこと別に憎んでなんかいないし。」

「なんでですか？少しの間だけとはいえ、レンをおかしくしてしまったのも事実でしょう？」

今もおかしいけど……、じゃなくて、鳴海さんの様子を見る限りレンのことをものすごく慕ってるみたいだったから憎まれたり恨まれたりしてもおかしくないのに。

「……そうね。でも、あの後のレン様のご様子を見てたらあなたを憎むことなんてできなくなっちゃったわ。」

「……。」

「レン様、あなたのことを話す時とても楽しそうに話すんだもの。ここ最近では見たことないくらい綺麗な笑顔をされてたわ。……私やテツと話してもあんな笑顔見せないのに、正直妬ましくいくらいよ。だからすぐわかったの、貴方は悪い人じゃないって。」

「それにね……、私知ってるのよ。レン様が女だってことも。」

「……いつ頃から気づいてたんですか？」

「気づいたのは半年くらい前のことよ。レン様がシャワーを浴びてる時に偶々背中を見てしまったのだけど、あまりにも華奢すぎるし、腰回りを見たらすぐに気づかされたのよね。それに、レン様からはそれらしい匂いもしなかった。清潔にされてるとはいえそういう匂いがしなかった時点で違和感を覚えてたの。」

「やっぱり、さすがレンのそばにいますね。」

「当たり前よ。だけど、この事実ができることなら………気づきたくなかった。」

ふるふると震えながら俯く鳴海さん。彼女のその気持ち、わからなくもなかった。

「………本気で、本気でレン様のが好きだったの。その事実を知ってしまった時、苦しんで、つらくて、とても耐えられなかった。」

「………鳴海さん。」

「………私の願いはもう叶わない。だけど、レン様のごことは誰よりも好きなの。だからレン様には………幸せになってほしい。」

「……………」

「木崎……………、レン様のこと幸せにしてあげて。」

「……………俺には無理ですよ。俺、アイツのことをそんな目で見たことなんて一度もないんです。」

「……………」

「さっきの質問の答えですけど、レンは俺の友人で、ライバルです。昨日のフアイトでアイツは更に大きくなった。自分もなんだかんだ言いながらも嫌いではないんで、仲良くしていきたいとは思ってるんですよ。」

「……………なによ。」

「え?..」

次の瞬間、鳴海さんの渾身の右ストレートが俺の顔面を捉えた。

「ぶっぶっぶっ!」

女性とは思えない威力に驚きつつもバランスを崩し、そのまま俺はいすと一緒に倒れ

てしまう。

「貴方はレン様と繋がれる資格がある!!私と違ってね!!なのに、なにそんな贅沢言ってるのよ!!」

「いぎなりなにずるんですか!?!てか、向こうから一方的に絡んできて好きもクソもないですよ!!」

「そもそも貴方はレン様と関係があるだけでもありがたいことなのに、それに加えて好かれてるのよ!?!もう、神に感謝してもいいくらいだわ!!」

「知らんがな!!それは鳴海さんが一方的に思ってることでしょーが!!」

「なんでレン様はこんな畜生人間なんか好きになったのよおお!!」

……畜生呼ばわりは流石に酷くないですか？

「すみません、流石に鳴海さんの気持ちを蔑ろにしすぎでした。」
「……………」

あの後、言い合いになって15回くらい顔面に拳を捻じ込まれた俺は根負けしてこうやって頭を下げている。鳴海さんも目を赤くして息をあげていた。女性泣かすなんて本当に自分って畜生だな。そういうところ直さないと……………」

「……………」お詫びと言ってはなんですけど、朝食食べていきますか？」
「……………」うん。」

とりあえずなにも食べてなかったみたいなんで朝食を作って食べてもらった。鳴海さんに美味しいと言ってもらったのでよかったです。

番☆外☆編

トツプスターチエル 『貴方に聴いてほしくて。』

『♪』

俺はソファアに腰掛けて、テレビ越しに聞こえる歌を聴いていた。彼女の歌は綺麗で透き通ってて聴いてて自分の心も洗われるような、そんな声だった。

「ハールトっ♪」

後ろから突然俺の名前を呼ばれ、抱きしめられる。

「なに見てたの？」

「…急に後ろから抱きついてくるのはやめろっていつも言ってるだろ。……チエル」
「いいじゃない、寧ろこうやって私が会いに来てることに感謝してほしいくらいだわ。」

ふふんと偉そうに喋る彼女こそが俺が観ていたテレビに映っていた、超有名アイドルのチェルだ。『歌姫』とも呼ばれた彼女の美しい声に魅了されたファンも多い。テレビに映る彼女は綺麗な銀髪をツインテール状に結び、前髪をピンク色のリボンで可愛くまとめているのだが、こうやってオフの日に俺に会いに来る時は銀髪は全ておろしているのだ。やっぱりどんな姿でも可愛くて美しく綺麗だなと常日頃思わされている。

「トップアイドル様が俺みたいな一般人の相手なんかしていいのか？こつちのマスクミはこういうことには敏感なんだぞ？」

「その時はその時よ。他人の汚点を見つけてそれをでっち上げようとするなんて、ニンゲンって本当クズよね。」

「俺もそのニンゲンの一人なんですが。」

「むう……、ハルトはニンゲンでもいい方のニンゲンだからいいのー！」

チェルは不機嫌そうに頬を膨らませて抱きしめる力を強めた。そんな彼女は人間ではない。こうして二本足で俺のところまで会いに来てくれるが、本来の姿は違う。彼女の種族はマーメイド、つまるところ人魚だ。本来は下半身の方は魚のようになって地上に上がってくるなど、そう多くはないと言われている。

そんな彼女との出会いは俺がまだ幼い頃のことだ。海辺を歩いていた時に海岸に打ち上げられていたのを見つけたのがきっかけだった。

「だれか倒れてる……。」

海岸を散歩するのが日課だった俺は砂浜に倒れている人影を見つけた。駆け寄って声をかけようとしたときに異変に気付いたんだ。

「あれ、この人、足が……。」

そう、上半身の方は何の変哲もない人間の身体なのに、それより下が綺麗なウロコに尾ひれが付いていてまるで魚のようになっていたのだ。

「ん、んん……?」

「あ、気づいたみたいだね。」

「……は……？」

「地上だよ。君、打ち上げられてみたいだけ大丈夫？」

「ちじょう……？地上ってことはもしかしてあなた……ニンゲンなの……？」

「うん。僕、ハルトって言うんだ。君は？」

「私……？私はチエルって言うの。」

「チエル……、うん、いい名前だね。」

これがチエルとの出会いだった。海の底に人魚の住む国があることは知ってたけど、交流なんてものは当時は無かったらしく、自分の中でも架空の存在でしか無かった。でも、実際にこうやって会えて話している。

「あなたもね。ハルト……、いい名前だと思うわ。」

そう言って優しく微笑む彼女を俺は今でも鮮明に覚えている。その後も度々海岸に行ってはチエルに会って楽しく二人で色んなことを話したりした。それがいつの間にか俺の楽しみにもなっていたんだ。

「……………いい名前だね。」

そうやって優しく微笑む彼の顔は今でも鮮明に覚えてるわ。

私は突然現れた渦潮に巻き込まれて気づいたら地上に打ち上げられてたみたい。目がさめるとそこにいたのはニンゲンだった。私も話には聞いていたけどニンゲンを生で見たのは初めてだったから少し動揺してたの。そもそも人魚はみんな女ばかりだから異性とも会うのが初めてだったのよね。彼と話すとき心が穏やかになって、楽しかった。だから、しょっちゅう地上に行つては砂浜でハルトと楽しくいろんなことを話してたの。

「……………うん。やっぱりチェルは歌が上手だよ。」

私が何となく覚えてた歌を口ずさんだときに彼はそう言ったわ。そのことを聞いて

驚かされたのだけど、それ以上に嬉しかった。

「君の歌を聴いてると癒されるというか……、えーと、なんて言えばいいんだろ。……こっちも楽しくなって、穏やかな気持ちになるんだ。だからさ、チェル……。」

「君はアイドルになるべきだよ。」

——そう言われたとき、私の中で何かが変わったわ。

私はその後、必死に歌、ダンス、笑顔の練習をしてハルトの望む姿になろうとした。その間、ハルトに会えないのは寂しかったけど、ハルトに驚いて欲しくて、それまで我慢することにしたの。

『……優勝はエントリーナンバー2番、チエルさんです!!』

私はメガラニカの中でも最難関の新人発掘オーディションで優勝することができた。そのことを早くハルトに伝えたくて久しぶりに地上に行くことにしたの。海から顔を出して前にハルトと一緒に話した砂浜でずっと待ち続けたわ。

……朝から待ち続けて気がつけば日が沈み始めた頃よ。今日はもう海に戻ろうと思ったときだった。

「……………チエル……………か?」

突然聞き覚えのある声が聞こえてきて振り向いたの。

「……………ハルト……………?」

そこにいたのは最後に砂浜で会ったときよりも一回りもふた回りも大きくなって顔

も身体も男らしく、たくましくなって……でも、その優しい瞳は変わらない、ハルトがいたの。

「久しぶりだな……、前に会ったときよりも可愛らしくなったんじゃないか？」

彼の声を聞いて、とくん……と、胸の鼓動が高まった。胸がちよつと苦しくて、切なくて……。

「……ッ！……つと。」

「……ハルト……ハルト、ハルトハルト……ッ!!」

気がつけば彼の胸に飛び込んだ。こんな姿じゃ陸地でまともに動けないはずなのに、どうやったのかハルトの胸に飛び込んで、抱きしめて、顔を埋めてた。どんなに力を込めてもビクともしない感じが心地よかった。突然こんなことされても黙って受け止めてくれて……、嬉しかった。

私……………やっぱり、ハルトのことが……………。

好·き·な·ん·だ。

私は生まれて恋なんてものは無縁だった。でも、ハルトと出会って、ハルトのことを想うと胸がキュツと苦しくなる。これが『恋』なんだって、そう思った。

……………それと同時に実感させられてしまった。

マーマイド ニンゲン
わたしとハルトの流れる時間が違うことに。

こうして、本格的にアイドルとしてデビューした私はみるみるうちに力をつけ、人気者になり、バミューダ△の殿堂入りともいえる、『トップスター』の称号をもらえるほどに成長したわ。

「……………なんで……………?」

満たされない。

私はアイドルとして、いろんな人を笑顔にしてきたわ。私としても、周りのみんなを笑顔にできて嬉しかったし、私にもみんなの希望になることが出来る、そのことを知っ

でもっとアイドルとして活動に没頭できた。……なのに満たされないの。

「ハルト……………」

自然とこぼしていた大好きな彼の名前。ハルトの顔を思い浮かべるだけで胸が痛くて、切なくて、寂しくて、どこかふわふわしたようなそんな感覚に陥った。

オフの日、私はハルトに会うことにした。海から顔を出して砂浜の方へ泳いで行くと、ハルトは砂浜に座って海を眺めているようだったの。

「ハルト……………」

「ん、チエルか…………。どうだ？アイドル活動の方は？」

ハルトはいつ会っても優しく接してくれる。こうして気にかけてくれるところも好き。

「私ね……、『トップスター』っていう称号をもらえたの。」

「へえ、すごいじゃん！お前がずっと目標にしてたところに遂に辿り着いたんだな！」

ハルトは自分のことのように喜んでくれた。彼の嬉しそうに笑う顔を見るとこっちも穏やかな気持ちになった。……………でも。

「みんなを笑顔に…、みんなの希望になれてると思ってるの。やりたいようにやって…、なりたいようになって…。それでみんなが笑ってくれてる、楽しんでくれてる…。でもね、どこかすっぽり穴が空いたような…、満たされない感じがするの……………」

「……………私、ハルトに見てほしい。私の成長した姿を、アイドルとしての私を。」

————自然に出てきた私の想い。

「私は…………ハルトが出会ってなかったら、ハルトに勧められてなかったらきつとアイドル

ルになっていなかったと思う。だから、その姿を貴方に見せたいの。」

「……………でも、俺には無理だ。俺は人間、海に長く潜ることも出来ないし、きつと身体も耐えられない。」

……………わかってた。わかってるつもりだった、悔しかった。だれよりも、どんな人よりもハルトに私の姿を一番見て欲しかったの。

——でも、それは叶わない願いなんだ。

——私はアイドルとしての活動を休止することにした。

私のファンの人たちもひどく悲しんでいたが、私の願いが叶わないことを改めて認識

させられてしまったあの時から何をやっても身が入らなくなってしまったから。

そんな何もやる気の起きない無気力な日々を過ごしていた私に転機が訪れる。

「試薬のテストター?」

「そうです。」

「効果はどんなものなの?」

「……最近、メガラニカと地上の**という国で交流があつたそうです。このままうまくいけばいずれは不可侵条約まで手が伸び、お互い交流関係を深めていくとの所存とされています。」

私は地上という言葉に反応した。

「ふ、ふーん。で、それとその薬になんの関係があるの?」

「私たちマーメイドは水の中でしか生きられない。……この尾ひれだつてそうです、泳ぐためだけの構造しかないのです。我々の中で唯一地上の人間と交流のある貴方なら

この意味わかるんじゃないですか？」

「……ッ!？」

なんで……、なんでハルトと会ってること知ってるのよ……!？」

「なんでって顔してますね？まあ、こう見えても国家直属の化学者でして。そこらへんの情報は調べ済みです。」

「……そう、なにもかもお見通ししてわけね。」

実際こいつの言ってる通りだ。あの件以降、私は自分の種族を憎んだこともあった。

『なんでマーメイドなんかに生まれたんだろう。』

『こんな使えない尾ひれなんて……。』

『私にも足があれば……。』

そんなこと思ってた時期もあつたのは事実だ。

「はい。そこで我々は地上に適應するための手段を見出すことにしたのです。」

「で、それがその薬だと?」

「そうです。」

化学者がおもむろに取り出した錠剤、これが例の薬らしい。

「この薬なんですけど、飲むと一時的にですが、尾ひれが変化して人間そっくりの足になります。それに、薬がうまく身体と適應すれば、薬なしで、完全に自分の意思で変えられるようになるかもしれません。」

「ッ!!」

「それに、地上の外気に対する耐性も上がって過ごすこともできるようになるでしょう。」

私を夢中にさせるには十分すぎる説明だった。

「……なるわ、その薬のテストー。」

「ふふ、あなたならそう言ってくださると思いましたがよ、ご協力感謝します。」

こうしてテスターとしての契約を結んだ私は、毎週3日分の薬が送られてくるようになった。

「これで……、私もハルトと……！」

その薬を片手に私は地上へと上っていった。でも、その時の私は気持ちが高ぶって見逃していたのだ。薬の説明のある一文を……。

『この薬の副作用は……。』

いつもの砂浜にやってきた私は早速その薬を飲んでみることにした。ニンゲンの足ってどんな感覚なんだろう、使いこなせるのかとか色々不安もあったが、それをぐつと抑え、錠剤を一つ飲み込んだ。

「………………。あれ、なにも起きないじゃないやな…きやつ！」

突然視界が真っ白になった。そして、それも収まって目を開けたときだった。

「な、なんだったのよ………………。…………ツ!!」

私は下半身の違和感に気づいた。恐る恐る下を見ると、白くて二つに伸びた綺麗なニンゲンの足が生えていたのだ。

「す、すごい……………！本当にニンゲンの足が……………!!」

あの薬の効果は本当だった。嬉しくなった私はその足で陸に立とうとしたのだが……………。

「あ、あれ……………？」

足が思った通りに動いてくれなくて中々うまく立てない。足がガクガクしてバランスを取るのも難しい。

「へ、このままじゃ歩くのもままならないじゃない……!」

でも、嬉しかった。こうやってニンゲンの足で歩けるように練習するのは楽しかった。前みたいに地上に上がらないことを悔やんでいるんじゃない、しっかりと地に足をつけて立っているんだから。

気がつけばもう夕方になっていた。

「や……、やった……! やつと立てたわ!!」

足がガクガクしているが、ちゃんと立てるようになった。

「あ、あとは……………歩くだけ……………、きやつ!？」

右足を前に出そうとした瞬間バランスを崩してしまう。

「……………おいおい、危ないぞ?？」

聞き覚えのある声とともに私を後ろから抱きとめてくれた。

「ハルト……………!？」

「……………どうしたんだ、その足。とうとう人魚やめたか?？」

振り向くとそこには大好きなハルトの顔があった。

『どくんっ……………!!』

「ツ!!」

彼の顔を見た瞬間、今までにないくらいに心臓の鼓動が高ぶった。そして、私の頭の中がハルトのことで埋め尽くされる。ハルトのことが愛おしくて愛おしくて仕方なかった。

「……………、チエル？」

どうしよう……………、ハルトのことが愛おしすぎて目が離せない。

「……………ちゅ……………♡」

「んむッ
!?!?!」

気がつけば彼と口づけを交わしていた。

「んむっ……………、ちゅ……………、くちゅ……………♡」

自分からキスをしてるのに頭の中が真っ白になってトびそうになる。それくらい気持ち良かった。

「……ふはあ♡」

「……はあ、はあ……げほっ、げほっ……。」

そしてしばらくして、ようやく口を離れた。私とハルトの口と口のあいだに銀色の糸が垂れる。

「はると……♡」

「……どうしたんだいきなり？」

「私ね……、ハルトのことが好きなの……、もう愛おしくて愛おしくてどうしようもないくらいあなたのことが好き……♡」

「……疲れてるんだな。」

「そんなこと……あれ……？」

そんなことないと言おうとしたら、視界がぼやけて……。

「…………俺も好きだよ…………チエル…………。」

え…………いま、な…………んて…………？

結論から言うと、試薬のテストターとしても十分だったらしく、改良を少し加えれば十分に実用可能とのことだ。かくいう私も薬を体に適応させることができたので思い通りに好きなタイミングでヒトの足になることができるようになった。

国交もうまくいったらしく、薬の実用化とともに地上との不可侵条約が結ばれ、マーメイドとニンゲンがお互いにその存在を視認し、友好関係を結ぶことができた。

ーーそして。

私はいま、ここにいます。

舞台の方からは『チエル！チエル！チエル！』という大きな掛け声。誰もが私のことを待ちわびているんだ。

「チエルさん、着信ですよ。」

マネージャーから携帯を渡された。そこには、

『ハルト』の3文字

「いふつ………♡」

その文字を見ただけで鼓動が高まって身体が熱くなった。

「もしもしハルト？」

『ああ……。にしてもすごい歓声だな。さすがはトップスター様つてところか。』

「当たり前じゃない、私を誰だと思ってるの？」

『……そうだったな。この様子だと大丈夫そうだな、じゃあ、俺しつかりと観客席から観てるからな？』

「うん……。私のこれまでの全てを見せるから。……見ててね。」

『頑張れよ……。チェル。』

そう言って、彼との通話は切れた。私は携帯をマネージャーに渡して、来ていたジャンパーを脱いだ。

——ハルト、私は貴方との出会いがなかったら、こんな大舞台に立つことなんてなかったのよ？

う。
——あなたのあの言葉が無かったらアイドルなんて言葉、知ることもなかったと思う。

——あなたがいなかったら、私、ここまで頑張つてこれなかったと思う。

——だから、見ててね、私の姿。

——これが貴方に送る、私の最大の恩返しよ。

「本番5秒前でーす！5……4……3……」。

大きく一回、深呼吸をする。

そして、前へ、あの光り輝くステージへ。

「いくわよ!!」

あのステージから1年が経った。チエルは地上でもトップアイドルとしてその地位を確立している。近くの本屋にあるアイドル雑誌を手にとっても、表紙を飾るのはやっぱりチエルだ。因みにチエルは勿論のことながら仕事だよ。夕方には帰るとのことだ。

初めてアイツのライブを観たけど、正直『すごかった』としか言いようがない。凄すぎてうまく言葉で表せないくらいだ。虜にされるってこういうことなんだなっと思った。

「あつ、ハルトさーん！」

とてとてと走って近づいてくる黒髪の子。

「こんにちは、ひゃっ!?」

「うおっと!?……そんなに急がなくても俺は逃げないぞ?」

「えへへ……、つい嬉しくて……。」

彼女の名前は『カノン』、最近人気急上昇中のアイドルグループ『カラフルパストラール』のメンバーの一人だ。礼儀正しくて食べ物に目がない可愛い子だ。

「このカフェのティラミスケーキが絶品みたいなんですよっ! ハルトさん行きませんか!」

そう言って手て持っているチラシに指をさしながら食い気味に話してくるカノン。

「そんなに焦らなくてもケーキは逃げないぞ?……よし、行くか!」

「はい! 行きましょうハルトさんっ♪」

カノンは嬉しそうに俺の手を引き、俺は手を引かれながらそのカフェへと足を運んだのであった。

目がガチだからマジでやめてくださいお願いします。

「……………嘘よ。そのかわり私も今度そのカフェに連れてってちょうだい。」

「イエス、マイロード。」

「私は女よ!!」

好きなプライドが高くて、かわいらしくて、努力家でちよつぱり嫉妬深い彼女が俺は好きだ。

「ねえ、カノン。」

『なんですかチエルさん?』

「私のハルトに手を出さないでくれるかしら。」

『なんでですか、そもそもハルトさんは貴方のものじゃないでしょう?』

「ハルトは私のこと好きって言ってくれたわ。」

『ハルトさん、今日カフェに行った時普段見ないくらい笑顔で楽しそうにしましたけどね。』

「……………最後の忠告よ。これ以上ハルトに手を出すようなら……………」

「殺すから。」

副作用：過剰に摂取した場合、精神に異常を及ぼし、若干の他者への依存傾向を示す
ときがあります。決められた量を飲むようにしましょう。